「 幸せな人形 」

辻本久美子

人物

園田珠里 (18歳〜94歳)

医学生〜医師

北中光太郎 (27歳)

珠里の孫の幼なじみ

石野 みわ (21歳)

光太郎のバイト先の同僚

岬 遼介 (39歳)

役者

杏奈

人形

林 玲子 (16歳〜20歳)

杏奈の持ち主

柏木 誠 (22歳〜98歳)

医学生〜医師 玲子の夫

林 森 (20歳)

中国人留学生

長谷川 孝作 (16歳〜90歳)

軍属時代の誠の部下

柏木 桜弓 (34歳)

誠と玲子の孫

雨の音。電話が鳴る。上手。電話で話す白衣の老医師・珠里。

珠里 そう。…はい。わかりました。明日出かけます。…大丈夫。私は今も現役。今日も患者を8人診ました。柏木さんによるしく…と言っても意識不明じゃね。では。(受話器を置き) …柏木誠。…遂にか。待ってな。君の最期を看取るのがこの珠里先生の仕事。

耳に掛けたマスクを外して、白衣を脱ぐ珠里。

下手。話し合っている若い男女。居酒屋のエプロンを着けた二人。

光太郎 え？それ、大変やん。そら早う帰ったらんと。お母さん、心細いわ。(頭を下げるみわに) シフトは心配せんでも。今どうせ暇やし。店長には俺からも言うとかから。

みわ じゃなくて、…その、実家、凄く不便な所なんです。…車がないと。(怪訝そうな

光太郎に) …北中さん、明日から2日お休みですよ。何か予定入ってます？

光太郎 いや。友達とカラオケ行くつもりやったけど、今あかんやん？ 約束パーや。

みわ だったら。…お願いしてもいいですか？

きよとんとしている光太郎。

舞台中央。正面を向いている遼介。宅配ピザの帽子をかぶっている。

遼介 は？え？でも、時間は間に合ったはずで…。(腕時計を見て) ああ…。また止まってる。電池かな。…すみません。…4回目です。え？…クビ…ですか…。

1

暗くなる舞台。雨の音。とぼとぼと歩く遼介。ポケットの小銭を数えてため息をつく。ふと顔を上げ、傘を畳むと剣のように持ち替えて下に向ける。

遼介 …今夜のこと、決して口外してくれるなよ。…いや、誓ってくれ。この剣にかけて。

この十字架にかけて。(声色を替えて) …誓え。…誓え…。(動き回って) さ、剣にかけて誓ってくれ、今夜、耳にしたことは断じて洩らさぬ、と。(かすかに笑みを浮かべ) …ホレイショー、この天と地のあいだには、人智の思いも及ばぬことが幾らもあるのだ。

拍手の音。驚いて振り向く遼介。拍手の方に当たるライト。塀の上に坐っている少女。杏奈。古風なフランス人形のようなドレスを着ている。

杏奈 「ハムレット」第一幕五場。素敵ね。

遼介 (驚いて見つめながら) …ありがとう。詳しいね。お芝居好きなの？

杏奈 昔観たの。芥川比呂志。あ、江守徹も。素晴らしかったわ。

きよとんとする遼介。塀から飛び降りて、遼介の前に立つ杏奈。

杏奈 大丈夫？…さつき、今にも死にそうな顔してた。

遼介 …見てたのか？

杏奈 ハムレットにはびったりだったけど。でも、理由は哲学的じゃないでしょ？

遼介 鋭いね。そう。金。仕事。ありきたり過ぎて、我ながら嫌になるよ。

杏奈 卑屈になることないわ。仕事とお金がなければ、人は生きていけないもの。

遼介 …時代遅れのハムレット。(自嘲気味に)ただでさえ、バイト掛け持ちしなきゃ

やっつけてないのに、こんなことになって。公演は中止、稽古もできない。エキストラ

もパー。バイトはクビ。もうすぐ40なのに、明日がどうなるかさえわからない。

杏奈 苦悩は人を強くするわ。あきらめないで。

遼介 君みたいな子供に慰められてもね。

杏奈 子供でも、この世の深淵は知ってるのよ。

遼介 君、どこの子？こんな時間に何してるの。家の人心配してるよ。早く帰らなきゃ。

杏奈 家がわからないの。

遼介 迷子かよ。

杏奈 あなた、名前は？

遼介 岬遼介。…じゃなくて、君の名前は？

杏奈 杏奈。

遼介 何アンナ？名字は？

杏奈 さあ、その時々で変わるから。杏奈だけでいいわ。

遼介 …どういふ親だよ。まさか虐待…。(杏奈の服を見つめ)古そうだけど、つぎはぎ

…ってことは、…一応手をかけてもらってるんだな。

杏奈 (自分のスカートの裾を持ち)みんな優しかったわ。これは澄代お姉さまが縫って

下さった。加賀友禅よ。玲子ちゃんが繕ってくれたのはこのレース。こっちはニーナち

ゃんの刺繍。ここは葉子ちゃんが。この布は節さんのインド綿。ああ、懐かしい人達…。

遼介 (首を傾げ)かわいそうな子か…。弱ったな。

杏奈 かわいそうな子じゃないわ。私は幸せな子よ。

遼介 ああ。うん、そうだね。とにかく、このまま放っとく訳に行かないし。交番に。

杏奈 交番はだめ。ろくに調べもせずには柵に放置して、期限が来たら廃棄。目に見えてる。

遼介 まさか。いくら警察がいい加減でも、子供をそんなこと。

杏奈 ううん、そういうこと平気ですよ。あの人達って。

遼介 それはないよ。人間だよ？

杏奈 私、人形だもの。

一瞬の激しい雨。杏奈の横、ゴミ置き場に捨てられた人形に当たる照明。翌日。下手。車体に「北中生花店」と書かれたライトバン（車仕様の装置）。キーを差し込みドアを開ける光太郎。下手からやって来るみわ。

光太郎 おはよう。

みわ おはようございます。（車の横を見て）北中さんの実家って、花屋さんなんですか。光太郎 うん。家で働いたかて、給料もらえんから居酒屋でバイトしてるんや。乗って。（驚くみわに）俺の車、エンジンの調子おかしなって。

みわ え。そうなんですか。…でも、お店の車でしょ…。

光太郎 今日は休み。いつもやったらこの時期、歓送迎会やパーティーの配達で大忙しなんやけど、今年はさっぱり。なんせ結婚式、葬式も自粛。花屋なんか、もろ不要不急や。

光太郎に促され助手席側に回るみわ。後ろに立っているマスク姿の珠里。

珠里 （光太郎に）ちょうどよかった。駅まで乗せて。

光太郎 え？は？俺ら、これから出かけるんやけど。

珠里 だからさ。駅まで頼む。

光太郎 どこ行くんや。こんな朝早う。

珠里 それはこつちが訊きたいね。寝坊助の光太郎が、こんな時間に。駆け落ちか？

光太郎 一つの時代やねん。

珠里 （みわに）気をつけな。優しそうな奴が一番危ないんだから。

光太郎 やめてくれて。ジュリばあ。どこ行くん。今、年寄りが出歩いたら危ないって言われてるんやで。感染したら一発で…。

珠里 誰に向かって物言ってる？

光太郎 そら、まあ、化けるほど医者やってたら、わかってはると思いますけど。

みわ お医者さん？

光太郎 この歳で、まだ患者診てるんや。信じられんやろ？俺ら子供の時でも、結構なばあさん医者やったんやで。俺の幼なじみ…のばあちゃんなんや。赤毛のジュリ先生。

珠里 今じゃ白髪で殆どわかりやしないけどね。若い時は目立ったもんさ。

光太郎 この歳でハーフ。アメリカと戦争してた頃…？

みわ …アメリカと戦争？いつ？

珠里 （咳払いして）いろいろモノ申したいけど。とりあえず、私の母親はイギリス人。

光太郎 アメリカ人やと思うてた。…今日は休診日なん？

珠里 臨時でね。早く後ろ片付けて。これじゃ乗れやしない。

光太郎 いっつもこれや。(後部座席を片付けながら) ほんま、どこに行くん。

珠里 金沢。

光太郎 え？俺らもやで。偶然やな。…あ。

しまったというようにみわと顔を見合わせる光太郎。

珠里 それならちようどいい。駅じゃなくて高速ね。

光太郎 いや、そやけど、金沢いうても広い…。

珠里 とりあえず金沢のインターまで。助かったわ。あんた達、マスクしなさいよ。

バッグからマスクを取り出し二人に渡すと、さっさと乗り込む珠里。顔をし

かめる二人、しぶしぶ車に乗る。上手。人形を持って歩いている遼介と杏奈。

遼介 杏奈。君さ、本当に交番に行く気はないの？

杏奈 言ったでしよ。私は、持ち主の所に帰りたいの。

遼介 だから、その為にも覚えてること全部おまわりさんに話して、調べてもらった方が。

杏奈 そのおまわりさんって、どんな人か、遼介知ってるの？

遼介 いや…。知り合いにはいないけど。

杏奈 だったら、信用できないわ。

遼介 でも、向こうは専門家だから、きつとちゃんと探してくれと思うよ。

杏奈 遼介、それがあなたのウィークポイント。人を信じるのは美德。でもね、信じ込む

と痛い目に遭う。今までその連続だった。…でしよ？(うなづく遼介に) あなたに必要

なのは、疑うってこと。それが演技の幅にもなるのよ。(苦笑する遼介に) 第一、人形

の私の言うことが、警察に通じると思う？私の話を信じたのは、遼介だから。でしよ？

遼介 …うん。確かに。…そうか。

杏奈 だから私は遼介しか頼れる人がいないの。さ、歩きましょう。すぐに日が暮れちゃう。

納得したように歩き始めるが、ふと気づき首を傾げる遼介。周囲を見る杏奈。

杏奈 ねえ。どうしてみんなマスクをしてるの？風邪？

遼介 厄介な風邪が大流行で、みんな用心してるけど収まらない。薬もないし怖いんだよ。

杏奈 ああ。きつと、この間亡くなった静江さんもそれが原因だったのね。(驚く遼介に)

私の持ち主。5年ぐらい前からのね。静江さんが亡くなって私は捨てられたらしいわ。

遼介 (ぎよつとして人形をつまむように持ち、杏奈から距離を取り) それ、いつ？

杏奈 3週間前。大丈夫よ。数日経てば感染しないって形見分けをする時に言ってたのを

聞いたわ。でも、静江さんの息子は、こんな古い人形捨ててしまえって。ひどいでしょ。
遼介 え？じゃ、君が会いたい元の持ち主って？

杏奈 玲子ちゃん。私の最初の持ち主よ。私を一番可愛がってくれた子。…と言っても、
最後に別れた時は、大人になってたけど。

遼介 いつ頃の話？

杏奈 あれは…、この国が戦争で負けた後。昭和20年の夏から秋…かしら。

遼介 昭和20年…。…ああ。…映画のエキストラ。何だっけ。軍服着て、泥だらけになっ
て。大貫監督。あれはきつかった。終戦は…1945年だ。…75年前？歴史だな。

杏奈 会いたい…。玲子ちゃんに。

遼介 幾つだ？その時20歳として…95？生きてるか？会えてもお互いわかるかどうか？

杏奈 わかる。玲子ちゃんは絶対私を忘れないわ。

遼介 人間はね、年をとると忘れるんだよ。悲しいけどね。

杏奈 ううん。玲子ちゃんは忘れない。そう言ったもの。

遼介 俺のじいちゃんは、86で死んだ時、俺の顔も名前も忘れてた。俺の事一番かわい
がってくれたのに。俺のハムレットを観るまでは死ねないって、ずっと言ってたのに…。

立ち止まり、その場にうずくまる遼介。振り向く杏奈。

杏奈 あなたがそんなに素直なのは、そのおじいちゃんに、心から愛されてたからなのね。

子供に必要なのは、見返りなしの愛情。それがよくわかるわ。…わかったから、もう泣
かないで。（遼介の顔を覗き込み）…どうしたの。顔が真っ青。

遼介 …気分が悪い…。

周囲を見る杏奈。中央の盆が回り、現れる北中生花店のライトバン。

光太郎 （地図を見ながら）あれ？どこで間違えたんや。インターの入り口とは反対やん。

みわ …すみません。スマホの充電切れてるの、忘れてて。

光太郎 いや。俺かて、うっかりしたわ。たぶん玄関で上着来た時に、落としたんや。

（振り向いて）ジュリばあ…は、持ってるわけないわな。

珠里 スマホ頼みだところなるってこと。今時カーナビも付いてないのかい。この車。

光太郎 店の配達は、基本近所ばかりやから。…ええ？この地図も、1996年版？

珠里 全く光太郎らしいね。昔から一緒だ。詰めが甘い。

光太郎 そら、晴人は出来が良かったから、俺なんかとは…。（言葉を呑み込む）

珠里 出来がいいと思っただけだね、結局、出来過ぎたるは及ばざるがごとしだ。

窓の外に目をやる珠里、道に座り込んでいる遼介に気づき、ドアを開ける。

光太郎 ジュリばあ？

珠里 (遼介に近づき) どうしたの？気分が悪い？

ぐったりしている遼介。

杏奈 さっきまで普通に喋っていたんですけど、急にこうなっちゃったんです。

珠里、驚いたように杏奈を見つめる。うなづく杏奈。考えている珠里。

珠里 光太郎。この人、運んで。後ろのバケツどけて。寝かせる場所作って。(目を丸く

する光太郎に) さっさとしな。病人だ。

光太郎 参ったな。医者のスITCH入ってしもた。

みわ (小声で) …このまま行っちゃえば？

光太郎 え？

みわ (小声で) このまま。

みわを見る光太郎。

みわ 面倒に巻き込まれますよ。それこそ、変な病気だったりして。

光太郎 …そうはいかんやろ。…友達のばあちゃんや。

みわ …そう…ですね。

光太郎 急いでるのに、ごめんやけど。

みわ …いえ。

珠里に呼ばれた光太郎、しぶしぶ車を降りて、車の後部を片付け、遼介を

運ぶ。杏奈には気づかない光太郎とみわ。遼介の容態を診る珠里。

光太郎 何？救急車呼ぶ？

珠里 一過性の貧血だね。大丈夫。大したことはなさそうだ。

遼介 …すみません。急に目の前真っ暗になって。

珠里、光太郎の荷物から新品のペットボトルを出し、遼介に飲ませる。

光太郎 それ、俺の…。

珠里 けちけちしない。私のは飲みかけ。(遼介に) あんた、食べてないんじゃないの。

遼介 …ああ。…はい。昨日の朝から…。

珠里 (光太郎に) 向こうのコンビニで、パンと飲み物、余分を買って来て。

光太郎 あ、うん。

走り出す光太郎と一緒に下手に消えるみわ。

遼介 すみません。俺、金少ししか持ってないんで…。

杏奈 人は、食べなきゃ死んじゃうから苦労しますね。

珠里 そうね。あなた、名前は？

杏奈 杏奈と申します。

珠里 しつげがよくできた子だこと。

杏奈 ありがとうございます。

珠里 (不思議そうな遼介に) わかるわよ。この子のこと。化けるほど長く生きてるとね。

遼介 …俺は、まだ40前なんですけど。

珠里 見込まれたんだね。きっと。選ばれた。

うなずく杏奈。きよとんとする遼介。

杏奈 一緒に乗せて行つて頂けますか？

遼介 おい、そんな厚かましい…。

珠里 どこまで？

遼介 わからないんです。昔の持ち主の所に行きたいって。金沢のお城の桜を覚えているって言うんですけど。こいつ…、杏奈の記憶だけが頼りで。しかも75年位前だって。

珠里 …75年…。終戦の年？

杏奈 満洲で、玲子ちゃんとはぐれてしまったんです。私。ロシア人の女の子に拾われてソ連に連れて行かれそうになったんだけど、また別の日本人の子に盗まれて、日本への引き揚げ船に乗ることができました。でも玲子ちゃんがどこに行ったのかはわからないまま。今までの持ち主、色んな人をお願いしたけど、誰も本気で聞いてくれなくて。

遼介 え？そうだったの？

うなずく杏奈。

珠里 やつぱり選ばれたんだね。君。

首を傾げる遼介。雷鳴。ビクツとする杏奈。空を見る珠里。暗くなる舞台。

回想。舞台に一人佇む杏奈。盧溝橋事件の勃発を告げるラジオ。

杏奈 あの頃の東京に、まだ戦争の空気はなかったわ。玲子ちゃんは10歳。いつも病気がちで、学校もお休みすることが多い子だった。歳の離れた澄代お姉さまは、そんな妹の為に私を作つて下さったの。栗色の髪に綺麗なドレス。(ドレスを触り) お姉さまはお裁縫が得意で、いろいろな生地を持つてらしたわ。これは着物の友禅の生地。ここはチャイナドレスの端切れ。そして、こっちはフランス製のレース。このリボン

は英国製のベルベット。世界の布が集まっていて素敵でしょ。アンナちゃんと名付けられた私は、西洋のおとぎ話が好きだった玲子ちゃんのお気に入りになったの。

ラジオは昭和15年のオリンピックピック東京大会の中止を発表。振り向く杏奈。

杏奈 ある日、私は玲子ちゃんに内緒でお姉さまに連れ出されたの。お姉さまは、周囲を気にしながら、私の胸元に何かの紙切れを入れたわ。(ドキッとした表情で胸元を押さえ) ……そして、そのまま誰か知らない男の人に渡された。……そしてまた、別の人に。

黒子に体を回され胸元の紙片を出し入れされる杏奈、目が回り倒れる。中国戦線の漢口陥落を告げるラジオ。人々の歓声。ゆっくり立ち上がる杏奈。

杏奈 お人形を作るのが上手なお姉さまは、人形劇のサークル活動をなさっていたの。そのお仲間たちは戦争に反対する運動をしていた。……そして、その中にお姉さまの好きな人がいたの。お姉さまは、その人の為にお手伝いをしていたのね。私はその人達の連絡の道具に使われていたんだわ。そのことが警察に知られて、人形劇のお仲間たちは次々に逮捕されていった…。私も何日も警察に調べられて怖い思いをしたわ。そして、私やと玲子ちゃんの手元に戻された時…。

雷鳴。振り向く杏奈。激しい雨の音。川の流れる音。

杏奈 お姉さまは、もうこの世にいなかった。……お姉さまが好きだった人は、警察に追われて絶望の果てに、川に身を投げてしまったの。……お姉さまを道連れにして。

激しい水音。雷鳴。暗くなる舞台。

みわの声 わっ！

急ブレーキの音。中央に現れる北中生花店の車。光太郎にしがみつくみわ。

光太郎 ……びっくりしたあ。

みわ (あわてて体を離し) すみません。……雷苦手で…。

光太郎 (照れて) ええけど…。(後部座席に) ジュリばあ、大丈夫やった？

珠里 頭打つかと思っただよ。

光太郎 その人は？

珠里 ……寝てるね。

光太郎 え？大丈夫なん？

珠里 飲まず食わずで、結構歩いてたらしいから、よっぽど疲れてたんだろ。

みわ (光太郎に) いいんですか…？そんな人、一緒に乗せて…。

光太郎 しょうがないやろ。こんな雨の中を放り出すのはあんまりや。

珠里 このご時世、知らない人間と濃厚接触は控えたいところだけどね。同じ金沢方面だ
って言うし、乗せてやるしかないわね。

みわ …は…い。

光太郎 こごどこや。…道訊こうにも誰もおらんし、店は全部閉まつてるし。参ったな。

珠里 さすが日本人だね。みんなお上の言うことにはへへえくで自肅か。

光太郎 ジュリばあみたいに、その歳で出歩く怖いもの知らずの方が珍しいんやで。

珠里 …政府の言うことなんか信用できるもんか。あいつらは国民のことなんかこれっぽ
っちも考えてない。自分の利権と保身のために税金を使い倒して生きてる輩だ。

光太郎 こわ。ジュリばあ、過激やな。

珠里 権力が利己的なのは、今も昔も同じ。私達は、散々ひどい目に遭って来たんだ。お
上の言うことをきけ。反対する奴は非国民だ。そう言われて、我慢に我慢を重ねて言
なりになって、そのあげく、いとも簡単に見捨てられた。

光太郎 戦争中のこと？

珠里 戦前も戦中も戦後もさ。もうあんない加減な連中の言いなりになんかなるもんか。
私は、もう我慢はしない。人生の最後に、自分は自分の声に従って生きるんだ。

光太郎 専門家やしな。そこまで生きてたら怖いもんもないか。で、金沢に何しに行くん？

珠里 …約束したんだ。桜を見るって。

光太郎 …花見？

珠里 皆で約束した。この桜を見に来よう。オリンピッククみたいに、これから4年に一度。
珠里を見つめる杏奈。光太郎、背後に何かを感じ、急ブレーキを踏む。

みわ え？どうしたんですか？

光太郎 (振り向いて) 今、ジュリばあの隣に何か…。

珠里 何か見えた？

光太郎 その人は…。

珠里 まだ寝てるよ。

みわ (首を傾げる光太郎に) 大丈夫ですか？ちよつと休みます？

光太郎 ああ…。疲れたんかな。

みわ あ、あそこにお店が…。道の駅。電気がついてる。

中央の盆が回って止まる車。

みわ 小降りになつてる。私、ちよつとお手洗いに…。

光太郎 ジュリばあは？年寄りに近いんやろ。

珠里 そういうこと、レディに言うかね。

光太郎 レディ…。誰やねん。

みわに続いて降りる珠里。二人、下手に消える。物音に気づき起きる遼介。

光太郎 (キョトンとしている遼介に) あ？よう寝てはったね。

遼介 ああ…。すみません。ここ、…どこ？

光太郎 それがようわからんのだ。道に迷うてしても。おたくも金沢やて言うから、そのまま来てしもたけど。電車に乗るんやったら、どっか近い駅探しますか？

遼介 ああ…。いえ、ご迷惑でなければこのまま乗せてもらえると助かります。

光太郎 とつくに迷惑やから、もう一緒や。

遼介 すみません。

光太郎 もとはと言え、あのジュリばあ。あれにひっかかったんが運のツキやな。

遼介 ジュリばあ…。あのおばあさん？お医者さんなんですね。

光太郎 俺の幼なじみのばあちゃん。とつくに90過ぎてるけど、あの人には誰も敵わん。

遼介 へえ…。

光太郎 年寄りの昔の苦労話は、大概愚痴やけど、ジュリばあの話は、何か違うんや。

面白いし、聞いててスカッとする。

杏奈 私と気が合うかもね。

遼介 あ、そうか。杏奈は同じ時代に…。君も相当な歳なんだね。

光太郎 …誰と喋ってはるん…？

遼介 え？

杏奈 この人、私のことわかってないのよ。

遼介 (光太郎と杏奈を見比べ) あ、いや。その…俺、役者やって。今、ちよつとその。

光太郎 あ、役者？へえ…。ビックリした。人形相手に何言うてんのかと。え？何て名前？

テレビに出てはるんですか？

遼介 あ、岬遼介と言います。まだまだ売れない役者で。舞台は時々やってますけど、映

画やテレビはセリフのない役とか、エキストラばっかりで。

光太郎 ふーん。たぶん知らんわ。ごめん。

遼介 あ、いえ。僕の方こそ、何かすみません。

光太郎 役者で、何かこう…ワッ！としてるんかと思うけど。おたく、えらい地味やね。

遼介 よく言われます。

光太郎 よう見たらかつこよさそうやし、ええ声してはんに。何かなあ。

遼介 すみません。

光太郎 それや。あやまらんでもええのに、あやまる。

遼介 ああ…。

光太郎 ま、そんな人、ようおるから、そういう役来たら、うまいことできるわ。

杏奈 言われっ放しね。

遼介 まあ、当たってるし。

光太郎 ごめんやで。年上の人に。

遼介 あ、いえいえ。

杏奈 今、そういう役に入ってるでしょ。お人好しで腰が低くて謙虚な貧乏役者。(ど

きつとする遼介に) この場合、そのキャラで行く方がただ乗りさせてもらえる。

遼介 (小声で) …君のためだろ。

杏奈 そうよ。そういうことができる。人は誰でも。役者は特に。成長してるわね。

遼介 ほめてるの？くさしてるの？(不審そうに振り向く光太郎に) あ、すみません。

…どうもセリフが抜けなくて、つい口から出てしまっただ。

光太郎 はあ…。そういうもんなんや。

下手から戻って来る珠里とみわ。憤慨しているみわをなだめている珠里。

みわ だって、腹立つじゃないですか。

ドアを開けて車に乗り込むみわ。後続く珠里。

光太郎 何？どうしたん？

みわ そこで、おばあちゃんのこと、突き飛ばした奴がいたんです。

珠里 突き飛ばされたわけじゃないよ。

みわ そう見えました。

珠里 肩が当たっただけ。

みわ だけど、あんなこと言われたら。

珠里 慣れてるけどね。

みわ ババアは出歩くな！死にたいのか！ですよ。おまけにこの車のナンバー見て、よそ

の県から来るな。バカヤロー、ばい菌バラマキに来やがって…って。

珠里 菌とウイルスの区別もつかない輩。

光太郎 (外を見て) どいつや。

みわ (下手を指さし) あれ、今あの白い車に乗ったあのオヤジ。

光太郎 普通のおっさんみたいやけどな。

みわ 睨みつけたら、女のくせに生意気な…って、鼻で笑って。ほんと、腹立つ。

杏奈 (遼介に) 出番じゃない？ちよっと懲らしめてやれば？

遼介 (小声で) ええ？何で俺が…。

杏奈 助けてもらって、その上ただ乗りまで。お返しの一つくらいして見せなきゃ。

杏奈に促され戸惑う遼介、相手を確かめるように窓から覗き見る。

遼介 (光太郎に) …ちよっと、そのサングラス貸してもらえますか。

光太郎から渡されたサングラスをかけ、車を降りる遼介。急にふてぶて

しい態度で、下手の方に歩いて行く。車から首を出して見る一同。下手

で白い車の男に声をかける遼介。遼介の姿だけがぎりぎりで見えている。

遼介 おう。おまえ。ちよっと顔出せや。そや。おまえや。さつさとせんか。ボケ！

男の声 な、何？

遼介 さつき、うちのもんがぶつかったとか、ふざけたことぬかしたそうやな。

男の声 え。いや。俺は、その。

遼介 どっちがぶつかったんか、はつきりさせようやないか。

男の声 いや、それは。

遼介 今うちの若いもんも来るさかいな。おまえがいちやもんつけてくれたんは、先々代

の姐御とお孫さんや。女やと思てなめた真似すんなや。ババアとかバカヤローとか言い

たい放題言うてくれたらしいな。ここはきっちり話つけよやないか。降りてこいや。

男の声 …すみませんでした。

遼介 なんやと？聞こえんな。

男の声 すみませんでした！

遼介 ほんまに謝っとんのかい！われ！

男の声 はい。申し訳ありませんでした！…あの、これで、勘弁してもらえますか。

遼介 なめとんのか！われ。

男の声 いえ。あの、そしたら、これで。

遼介 そんなはした金ですむと思うなや。こっちは話つけよて言うてるんや。

男の声 え…。だったら、どうすれば…。

遼介 悪いんは誰や。おまえか、うちのもんか。

男の声 …私です。

遼介 おまえが悪いんやな。

男の声 はい。

遼介 ぶつかったんはおまえの方やのに、こっちに八つ当たりして悪態ついたんやな。

男の声 はい。本当にすみませんでした。

遼介 反省してるんやな。

男の声 …はい。

遼介 二度と人に八つ当たりはせんと誓え。

男の声 は、はい。

遼介 言うんや。

男の声 …はい。に、二度と人に…。

遼介 八つ当たりは！

男の声 二度と人に、八つ当たりは、しません。

遼介 人だけちゃう。動物にも物にもや。八つ当たりは一番カッコ悪い。よう覚えとけ。

男の声 …はい。

遼介 ええ歳こいてみっともない真似すんなや。女房も子供もおるんやろが。

男の声 …いません。

遼介 そんなら、なおさらやないか。ろくな死に方せんわ。ちつとはましな生き方せえ。

男の声 …はい。

遼介 わかったらええ。今日は見逃したる。さっさと行け。あ、運転気いつけや。

車の急発進する音。呆気にとられている一同。戻って来る遼介。足が、が

くがく震えている。拍手する光太郎。

光太郎 すごいな。さすが役者さんや。

みわ …役者さん？よかった。本物かと思いました。私。怖かったあ。

珠里 大したもんだ。

杏奈 なかなかやるじゃない。

遼介 (汗を拭きつつ) 舞台の上ならともかく、こんな所で、素人さん相手に…。

みわ あいつ、びくびくしてた。すっとしました。ね。おばあちゃん。

珠里 あれだけおびえてると、ちよっと憐れだわね。

光太郎 大阪、河内とか：ですか？

遼介 違いますよ。実は、先月中止になった舞台、大阪のヤクザの役だったんです。ほんの一行の台詞で、すごく場面だったんですけど。一応関西弁の発音聴いて勉強してたんで。思い出して、なりきってみました。まさかこんなところで使えるとは思わなかった。杏奈 つぶれた芝居も、役に立ったってわけね。

遼介 ああ。まあ。：でも、ちよつと何て言うか、罪悪感が：。

光太郎 え？

遼介 啖呵きつて脅かして、相手が縮み上がってるのが：気持ちよかったです。：これって、もしかして、いじめとおんなじ気分なのかも：って。

どきつとする光太郎。

遼介 芝居なら好き放題言えて。でも、これいいのか、やってもいいことなのか：って。みわ そんなこと考えなくても。悪いのはあっちだし。少しぐらい怖い思いさせたって。

珠里 そうね。正義も正論も、通じる相手には有効。だけど、頭からその概念がない人間には、時に脅しや暴力も必要かも。

みわ おばあちゃん、過激。

珠里 さつきから気になってるけど私はあなたのおばあちゃんじゃない。名前を呼んで。

みわ え：と、ジュリばあ：さん？

珠里 ：さんはつけなくていい。むしろ、いらない。

みわ じゃ、ジュリ先生で。

光太郎 (みわに) めんどくさいやろ。ジュリばあ、さつきは、よう喧嘩せんですましたんやな。いつもやったら、そんなこと言われたら、黙ってへんやろ。

珠里 まあ、この子が一緒だったからね。

みわ え。私？

珠里 下手なこと言つて、光太郎の彼女巻き込んだじゃ、恨まれるから。

光太郎 彼女ちゃうわ。職場の同僚や。

珠里 隠すことないだろ。柄にもない。

光太郎 ほんま、ちゃうつて。居酒屋のバイト仲間。(みわに)なあ。

みわ え。：ええ。

杏奈 (二人を見つめ) 青春：か。いいわね。今は。男も女も自由を満喫できて。

珠里 それは見かけだけ。本質は怪しいもんさ。さつきのオヤジみたいな勘違い野郎もま

だウヨウヨしてるし。この国はそんなに簡単には変わらない。

杏奈 ……そうね。そうかもしれないわ。悲しいけど。

珠里 ……私は、あんな言葉を何千回何万回浴びせられてきたことか。…女のくせにでしゃばるな。それでも日本人か。異形の者が一人前の口をきくな。非国民め。

髪に手をやる珠里を不思議そうに見つめる光太郎とみわ、遼介。

盆が回り、動き出す車。照明が落ちる。

幻想、或いは回想。—1943年。5月。

林家の居間。ラジオから流れるアツツ島の日本海軍玉砕のニュース。その横の棚に置かれた人形。玲子、仏壇に手を合わせている。隣に坐っている杏奈。

玲子 ……お姉さまが亡くなってもう5年もたつたのね。支那の戦争はまだ終わらない。

杏奈 終わるどころか、どんどん激しくなっていくじゃないの。アツツ島では、日本軍が玉砕…って、要するに全滅ってことでしょ。

玲子 ……玉と砕ける。言葉は綺麗だけど。

杏奈 人間の体でしょ？砕けたのは。血が噴き出し、肉や骨が飛び散る。

玲子 やめて。想像すると怖くなる。

杏奈 その残酷な姿を想像させないように、綺麗な言葉で飾るのね。お偉い方達は。本当は負け戦なのに、被害は少なしとか、大本営発表は信用できないわ。

玲子 アンナ、この頃お父様に感化されてない？

杏奈 お父様はお変わりになったわね。昔は、あれほどお姉さまの反戦活動を警戒されていたのに、今じゃ大学でもかなり自由主義的な思想の教授として知られてるんですよ。

玲子 お姉さまのことがあって、お母様も心労で続けて亡くなってから、たぶんお父様の中で、何かが動いたの。この世の中の全てをもう一度考え直す必要があるって。東京の大学を辞めて金沢に移って来たのも、同じ考えの学者さん達がこちらにいらしたからよ。

杏奈 このご時世だから、危険思想の持ち主として、官憲に睨まれているんじゃない？

玲子 そうなの。ここは軍の施設も多いし。最近、お帰りが遅くなったりすると心配で…。

下手で大きな物音。驚く玲子。慌てて人形の側に立つ杏奈。下手よりバタバタと入って来る二人の青年。後ずさる玲子。

玲子 ……柏木さん！どうしたんですか。

誠 すみません。勝手に上って来てしまいました。おどかして申し訳ない。今、その角を曲がった所で誰かにつけられていたことに気づいて。

玲子 憲兵…ですか？

誠 わかりません。先生は？

玲子 帰っておりません。

誠 まだ研究室かな。すみません。彼をかくまってもらえますか。

誠の後ろに立っている青年を見る玲子。

誠 同志の林（リン）君。中国からの留学生です。今、彼に迷惑をかけるわけにはいかない。僕は、表の奴をまいて来ますから。

玲子 そんなことしたら、柏木さんが。

誠 何、平気です。じゃ、頼みます。

下手に消える誠。おろおろする玲子。落ち着いた様子で帽子を脱ぐ森（セン）。

森 ご面倒をおかけします。

玲子 あ、いえ。日本語はおわかりに…。

森 少し。申し遅れました。林森（リン・セン）です。

玲子 林玲子でございます。

森 同じですね。同じ林という漢字。

玲子 あ、林…の、リンさん。

森 はい。センは森という字です。森林の逆です。面白いでしょう。

玲子 ああ…。覚えやすいですね…。

笑い合う二人を見つめる杏奈。下手の方で起きる大きな物音。あわてて森

を押し入れに隠す玲子。舞台が回り、林家の玄関。帽子を目深に被りマント

を着た人物になぎなたを突き付けられている誠。

誠 な、何なんだ。君はっ！

珠里 だから尋常に勝負しろと言ってる！

誠 尋常じゃないだろ。これは。いきなり人の家の玄関先で！

珠里 そんなことは関係ない。ここから先は逃さない。

誠 何なんだ。さっぱりわけがわからんだろう！

上手から駆け付ける玲子。

玲子 柏木さん！

誠 引っ込んでいて下さい。こっちに来ないで。危ない！

玲子 その人は…！

誠 だ、誰なんだ。君はっ！

珠里 そつちから不屈きな付文をよこしておきながら、何を言うかつ！

誠 …付文？

珠里 知らんとは言わさんぞ！

誠 ちよつと待て。おい。

珠里 ええい！往生際が悪い！

珠里のふるうなぎなたをかわすのが精いっぱい。誠。叫ぶ玲子の後ろから顔を覗かせる森、脇に吊るしてある布団叩きを手取る。珠里のなぎなたをよけようとする誠。次の瞬間、布団叩きで珠里の手元に一撃を食らわせる森。なぎなたを落とし、小さな叫び声を上げる珠里、打たれた右手首を押さえてその場にうずくまる。誠に駆け寄る玲子。

玲子 大丈夫ですか？

誠 あ、ああ。平気です。

珠里 何だ！二人がかりとは卑怯な！

珠里の帽子が落ちる。赤みを帯びた栗色の髪に驚く一同。帽子を拾う森。

珠里 (帽子をひったくり) 返せ！

誠 女…？

森 (珠里の手首を見て) すみません。強すぎました…。誠、診てやって下さい。

誠、戸惑いながら、珠里の手首を診ようとする。その手を払いのける珠里。

誠 骨が折れてないか診ないと。動かせるのか？

珠里 ただの打撲だ。

誠 素人判断が一番危ない。

珠里 医学生だ。これぐらいわかる。

誠 医学生？…女だろう？

珠里 女子医専だ。

誠 …女子医専？ああ、最近できた…。その学生が、どうしてこんな卑怯な真似を。

珠里 卑怯はそつちだろう。あんな卑劣な手紙をよこして。

誠 手紙って、何なんだ。さつきから妙な言いがかりをつけて来て。

珠里 この期に及んでまだしらばつくれる気か。

誠 この期も何も、知らないものは知らないんだ。

玲子 あのだ……。(ためらいつつ)その手紙って、一体どういう内容なんでしょうか？

珠里 (顔を赤らめ) ……そんなこと口で言えるか。

玲子 見せて頂けます？

珠里 あんな破廉恥なもの、すぐに破り捨てた。

玲子 何が書かれてあったんですか？

唇をかむ珠里。

玲子 柏木さん。

誠 俺は知らない。こいつの…、この人の間違いだ。濡れ衣だ。

珠里 ……異形の者の裸体画を描いてみたいと。…よくもあんなことを。

玲子 裸体画…。

意味に気づいて、自分の口を手で覆う玲子。

森 誠は絵を描くのか？

誠 冗談じゃない！絵は子供の時から大嫌いだ。自慢じゃないが、課題の人体解剖図を描くのにどれだけ苦労したか。絵なんか、必要もないのに描く奴の気が知れない。

森 (珠里に) その手紙の差出人がこの人だと、どうしてわかりましたか。

珠里 名前が書いてあった。ローマ字でカシワギマコト。医大剣道部は漢字だったが。

はっと気づく誠。

玲子 柏木さん、いつから剣道部に？

誠 だから俺じゃない！剣道部の柏木真。誠実の誠じゃなくて、真実の真の方のマコト。森 そういう名前の人がいるんだね。

誠 前にも別の件で間違われた。いい迷惑だ。そいつ絵を描くのか。ますますけしからん。玲子 (珠里に) これで柏木さん、この柏木さんへの疑いは晴れましたね。

珠里 そいつは、今どこに？

誠 知るか。勝手に探せ。

珠里 ……失敬した。この詫びは後日、改めて。

誠 いいよ。もう来るな。

頭を下げて立ち去ろうとする珠里。

森 すみませんでした。その手。痛みませんか。

驚いたように森を見る珠里、首を横に振る。

誠 ちゃんと湿布しておけよ。学校で習った通りに。後で腫れると厄介だぞ。

うなずいて下手に立ち去る珠里。見つめる玲子。

森 さつき、あの人が手紙の内容で異形の者と言ってたが、異形とはどういう意味なんだ？
誠 異形。異なる形と書く。つまり、普通の人とは違う姿かたちの者という意味だ。
森 異なる形…。

玲子 大柄な方ですものね。柏木さんと同じ位かしら。綺麗な栗色の髪で。西洋との混血でらっしゃるのかも。でも、異形なんて、ひどい言葉。あんなに美しい方なのに。

珠里の立ち去った方を見る森。回る舞台。

数日後。林家居間。人形の側に坐る杏奈。誠と森を部屋に案内して来る玲子。
誠 この間は、本当にご迷惑をおかけしました。これ、おわびのしるしに。

玲子に紙包みを差し出す誠。

玲子 まあ、そんな、お気遣いなく。

誠 大したものではありません。田舎から送って来た芋です。

玲子 助かります。最近食糧が手に入り難くて。ご近所でも自給自足だってお庭に野菜を植えるお宅が増えてるんです。うちもその庭に畑を作ろうかって父と話してたところ。

誠 戦況も、だんだん厳しくなってきましたからね。

玲子 森さんは…、お国の方のご家族は。

森 身よりはありません。満洲で孤児になっていたところを、親切な一家に助けられて、日本に留学生として来ることができました。

誠 森は、二胡の名手なんですよ。

森 名手かどうかは…。育ての親に教えてもらいました。

誠 二胡なら林先生のお宅で見かけたことがあると言ったら、ぜひ弾かせてもらいたいです。この間は、それで連れて来たんですが、あんな騒ぎになってしまっ

玲子 あれは父が知り合いから頂いたもので。胡弓と二胡って違うんですね。私、知りませんでした。父は全く弾けないので、そこで置物になってます。

玲子、部屋の隅の低い棚に立てかけられた二胡に目をやる。

誠 今日、先生は？

玲子 研究会で遅くなると言っていました。よろしかったら、どうぞ。

森 いえ、先生のお許しなしには。

玲子 構いませんよ。

珠里の声 ごめん下さい！

玲子 あら？どなたかしら。(二胡を指し)それ、どうぞ。ちょっと失礼します。はい！

下手に消える玲子。二胡を見つめる森。

森 いい楽器だ…。

誠 弾いてみるよ。

森 いや。持ち主に許可を頂いてからでないと、失礼だろう。

誠 森は本当に律義だな。中国人にしておくのが惜しいよ。

森、誠を見る。

誠 …あ、いや。すまん。失言だ。そういうつもりでは…。

森 わかっている。誠は日本人。僕は中国人。その差は歴然とある。

誠 いや。俺は…。

誠 日本の歴史文化は中国が源のはずだ。その日本人が中国人を下に見ている。確かに、今の僕の祖国は、他国に見下されても仕方ない状況だ。…しかし、…他国を侵略して憚らない日本人を見下す中国人もいるということを、誠は理解した方がいい。

森を見つめる誠。違い棚に置かれた人形のアンナにふと目を留める森。側に坐る杏奈、森に見つめられてどきどきしている。

森 この人形、面白い。

誠 え？

森 洋服の生地。ほら、これは日本の着物だろう？

誠 ああ…。そうだな。

森 こっちは中国の織物だ。これは、西洋のレース？

誠 これは加賀友禅だ。いろいろな国の端切れを縫い合わせて、作ってあるんだな。

森 …この世界が、この人形のようなら…。

誠 それこそ理想郷だ。…しかし、そんなものはあり得ない…。

森 そうだろうか。

森を見る誠。玲子、珠里を連れて部屋に戻って来る。

玲子 いいじゃありませんか。どうぞ。

珠里 いえ、本当に、私はもうこれで…。

誠と森を見て、引き返そうとする珠里。その背中を押して部屋に入れる玲子。

玲子 だめだめ、柏木さんには、ちゃんとご説明なさないよ。

洋装の珠里の姿に最初は気づかない誠、はっとして部屋の隅に逃げる。

玲子 園田珠里さん。この間のお詫びについて、おいしそうなお菓子を。

いきなり畳に手をつけて頭を下げる珠里。

珠里 申し訳ありませんでした！

珠里を見つめる誠と森。

珠里 全く私の勘違いで、とんでもないご迷惑をおかけしました。

誠 …あの剣道部の柏木真には…。

珠里 確かめました。こちらの柏木さんの仰っていたことに間違いはなく。あやつは、腕の一本もへし折ってやろうと思いましたが、…当人はおりませんでした。

誠 いない…って？

珠里 退学して、既に引っ越した後でした。

玲子 退学？

珠里 もともと気弱な男だったらしく、剣道も弱く絵ばかり描く軟弱者と周囲に馬鹿にされ続けて、自分を鍛えるために海軍に志願した…と、親友だという学生から聞きました。

玲子 気弱な人が、そんな恥ずかしい手紙を…？

森 気弱だったから…でしょう。

森を見る一同。

珠里 …はい。度胸試しのつもりで私を辱めるような手紙を書いて、気を奮い立たせたのではないかと、その親友が弁解していました。

誠 とんでもない奴だ。

森 …いや。…そうかな。もしかしたら、…本当に、この人のことを描きたかったのかもしれない。最後の思い出に。

玲子 …異形の者…なんて言葉を使つて？（珠里に）あ、ごめんなさい。

珠里 いえ。慣れております。

森 そういう言い方が、精一杯の照れ隠しだったのではないのでしょうか。もちろん、人として許されるものではありませんが。

森を見つめる珠里。

森 手は？大丈夫ですか？

珠里 あ、はい。

誠 ちよつと失敬。

珠里の手首を掴む誠。驚く珠里。

誠 異状はない。ただの打ち身だ。湿布はちゃんとしたようだね。色白で痕が目立つが。

恥ずかしそうに手を引っ込める珠里。

森 これも何かの縁でしょう。(誠に) 同じ医学を志す者同士仲良くすればいい。

玲子 …森さんの日本語、すばらしいですね。

森 え？

誠 こいつは優秀なんですよ。何でもすぐに会得する。日本で多くのことを学んで、祖国の役に立てたいと思ってるんです。志がある。

玲子 祖国…。満洲国の？

森 …いえ。私の祖国は中国だと、思っています。

珠里 (玲子に) 満洲国は、日本の軍部が作った、国とは名ばかりの政権です。

玲子 でも皇帝は、支那、…中国の方ですよね。

珠里 お飾りのね。中国は、清朝の時代から、西欧列強に踏みにじられて来た。今はそこに日本も入り込んでいる。しよせん、外国から侵略される運命なんです。

誠 侵略される方に問題があると言いたいのか？

珠里 それで仕方ないと諦めている国民が多いからその状況は変わらない。悔しければ力を合わせて強くなるべき。内輪で勢力争いばかりしてるから外国に付け入られる。

22

誠 それは侵略する側の都合のいい言い分だ。それを許すから、戦争はなくならない。

森 そうです。(珠里を見て) あなたの言う通り。私の国は、赤ん坊のまま荒野に放り出

されているようなものです。一人ひとりが知識と知恵を身につけ、成長して行かねば、

風雨にさらされ、狼に食いちぎられてしまう。国民の教育が、教育こそが大切なのです。

玲子 …皆さん、凄いのね。私には、とても難しくてついて行けませんわ。

珠里 そんなことを言っているから、日本の女は程度が低いと思われてしまうんです。

玲子 亡くなった私の姉なら、きっと皆さんのお話にも入って行けたでしょうけど…。

珠里 姉君？

玲子 …私なんかとは大違いで、何でもできて、勉強していた人なんです。でも…。

珠里 誰でも同じです。これからの女は、学んで賢く、そして力も強くならねば。

玲子 そりゃ、珠里さんほどの体があれば。…あ、いえ、この間のなぎなた、見事な腕前

で。私なんて、こんなチビではとても。

珠里 体格ではない。コツを掴めば誰でも上達します。

玲子 本当に？(うなずく珠里に) 今度、教えて下さる？私にも。

珠里 はい。

誠 おいおい、お手柔らかに頼むよ。玲子さんまで強くなられちゃこっちは立つ瀬がない。

笑い合う一同。その様子を見ている杏奈。暗くなる周囲。

杏奈 あの頃は幸せだった。玲子ちゃんも新しいお友達に囲まれて。でも、戦争は徐々に激しくなって、思想統制、学徒動員。厳しい生活がじわじわと押し寄せてきた…。

現代。車の中。後部座席で杏奈と話す珠里。二人の話に耳を傾けている遼介。

珠里 そうだったね。…二度と戻りたくない時代だ…。

杏奈 (珠里を見つめて) さつきから、思ってたんだけど、ジュリ先生、昔どこかで会わなかった？ 思い出しそうで思い出せないのよ。

珠里 そう？ (杏奈を見つめ) …この歳だからね。私は無理。

遼介 だから、人は歳をとると忘れる。その玲子ちゃんだって今会ったらわからないよ。

杏奈 玲子ちゃんは違う。絶対私のことは忘れてない。

遼介 玲子ちゃんと別れた時のこと、杏奈は詳しく覚えてるの？

杏奈 覚えてるわ。玲子ちゃんは、赤ちゃんを抱いていて、爆撃に逃げ遅れて…。(ふと

首を傾げ) …あの時、私は、どこにいたのかしら。玲子ちゃんは、どうして…。

考えている杏奈。

遼介 ほら。杏奈の記憶だって怪しいんじゃないか。

急ブレーキの衝撃。倒れかける珠里を支える遼介。座席から転げ落ちる杏奈。

光太郎 あぶなっ…！何や。あいつ。

遼介 どうしたんですか？

光太郎 自転車乗ってたじいさんが、いきなり空き缶投げつけて来よった。

遼介 ええ？どうして。

みわ よそもんは来るな…って、叫んでた。あのじい。

驚いたようにみわを見る光太郎。

光太郎 …後ろ、大丈夫やったか？ジュリばあ。

遼介 (珠里をかばう手を離し) はい。…あ、杏奈が…。いや、人形が落ちただけです。

杏奈 (遼介に助け起こされ) 全く。私は後回しね。ひどいもんだわ。

遼介 そりゃ、生きてる人が一番大事だから。

杏奈 どうせ人形ですよ。

珠里 …いつになってもどんな状況でも、必ずいるんだ。ああいう輩は。(外に目を向け)

排他的で、みんなと同じように行動しないと、不安。助け合いが好きなくせに、仲間の輪に入らない者には冷酷。力の強い者にだけヘイコラして、決して自分の声を上げない。

みわ (うつむいて口元を押さえ) …うつ。

光太郎 どうした？

みわ すみません。ちよつと。
ドアを開け、外に出てうずくまるみわ。光太郎、降りてみわの背中をさする。
光太郎 大丈夫か？

みわ すみません。ちよつと車に酔ったみたいで。

光太郎 あ、さっきのカツサンド、あかんかったんちゃうか。

みわ そうかも。ちよつと脂っこかったから。すみません。

外に出る珠里。

珠里 光太郎、その自販機でさっぱり系のドリンク買って来て。あればレモン味の。

光太郎 あ、うん。

下手に駆けて行く光太郎。

珠里 (みわに) 何週目？

珠里を見るみわ。

珠里 何ヶ月ってこと。医者だよ。それぐらいわかる。

みわ …病院には行ってないの…。

珠里 光太郎の子？

あわてて首を横に振るみわ。

珠里 光太郎は？知ってるの？

みわ 何も。北中さんはバイトの同僚です。ただ車で実家に送ってって頼んだだけで。

珠里 お母さんが交通事故で大けがしたから…？(うつむくみわに) それは本当の事？

みわ 自転車転んで肋骨を折ったというのは本当です。

珠里 肋骨だけなら、自宅療養だね。自然に骨がくっつくのを待つしかない。痛みはあるが、24時間看護が必要ってわけでもない。

みわ そう言ってました。

珠里 でも親孝行の娘は帰ってあげなくちゃ…と。

みわ …一人っ子なんで、いつも早く孫の顔を見せろってうるさく言ってくるから。

珠里 その子の父親はあ。

みわ もう別れました。顔も見たくない。

珠里 じゃ、どうするの。

みわ 産みます。たぶんお母さんも…。私の結婚より孫さえ抱ければ満足って人なので。

珠里 そう。ならいいけど。

みわ すみません。北中さんには言わないで下さい。よけいな気を遣ってほしくないし、

バイト先に変に伝わると嫌だし。

珠里 わかった。…ただ、光太郎を利用しないでね。

みわ え？

珠里 あいつ、本当に優しい子だからさ、あの子を騙すような真似はしないで。

珠里を見るみわ。車に戻る珠里。下手から飲み物を手に戻って来る光太郎。

光太郎 大丈夫か？

みわ はい。すみません。

光太郎 お母さん、心配やろけど、あんまり飛ばしたらあかん。休み休み行こうか。

立ち話をする二人を見ている後部席の3人。

杏奈 騙されちゃってるわね。完全に。

珠里 あれくらいなら、可愛いけど。

杏奈 もつと高度？

珠里 たぶん。あの娘はしたたか。…というより暗いものを抱えてる。

遼介 どういうことですか？

杏奈 役者なら働かせなさい。想像力。さっきの勢いで。

遼介 …僕にはどうもそれが欠けてるらしいんです。以前、言われました。

杏奈 誰に？

遼介 役者仲間。

杏奈 女の子？

遼介 …小学生の時の話をしたら、…結局あんたには想像力がないんだって。

杏奈 どんな話？

遼介 …言いたくないですよ。

杏奈 聞きたい。

珠里と杏奈に見つめられる遼介、しぶしぶ口を開く。

遼介 ももは小さな町工場でした。ある日、事務所に行ったら、経理担当の人が会社の

金庫から出した金を自分のポケットに突っ込んで。そのことを親父に言ったら、その人、会社を首になったんです。それ、俺の同級生の父親で。あわてて親父になかったことになって頼んだんですけど、だめで。…その同級生とは、そんなに親しくなかったけど…俺、そいつに謝ろうと思って…貯金箱持って会いに行っただんです。そいつは、自分の父親がバカだったんだからお前が謝る必要なんか無いって言うてくれたんですけど。杏奈 そりゃそうよ。

遼介 助けられなくてごめんって言って、その貯金箱を差し出したら…。

右手の袖口を左手でいじる遼介。見つめる珠里と杏奈。

遼介 バカにするなって。…助けなんかいるかって、その貯金箱を投げつけられて。

袖口をまくる遼介。

遼介 その貯金箱が割れて当たった時にできた傷です。まだ痕が残ってて。…結局、そいつの一家は夜逃げみたいにして引越していきました。…そいつのおばあちゃんが大病して治療費に困ってたんだって、後で大人たちが噂してた…。

杏奈 そうか…。辛い思い出ね。…で、その想像力がないって言った彼女とは、今も？

遼介 (微笑んで) 別れました。

杏奈 君の優しさを思いやれない女の子じゃ、別れて正解よ。

珠里 …その彼女の言ったこと、君は、…わかる？

珠里を見る遼介、小さくうなずく。二人を見る杏奈。

珠里 …優しさは、時に刃物になる。…助けるなんて言葉は逆に人を傷つけることもある。それは思いうがりでしかないことも…。

自分の手首の傷跡を見つめ、うなだれる遼介。その肩を抱く杏奈。遠い目で空を仰ぐ珠里。落ちる照明。

回想、または幻想。1944年4月。

林家の居間。棚に飾られた人形の横に坐る杏奈。座卓に皿を並べている玲子。杏奈 今日は何？お客様？いつもの方達？

玲子 そう。お城の桜が綺麗だからお花見。お父様が急用でいないのが残念だけど。

杏奈 柏木さん。(反応する玲子に) よくいらしゃるわよね。

玲子 そうね。お父様にいろいろ教わりたいことがおありなんですって。

杏奈 柏木さんはお医者様でしょ。お父様は哲学。専門が違うんじゃない？

玲子 勉強熱心なのよ。何に対しても。それに森さんが一緒のことが多いから。

杏奈 森さんの二胡は美しいわね。…森さんも不思議な方。お一人ではいらつしやらない。
玲子 そう言えばそうね。初めてお見えになってからもう一年も経つのに、まだ遠慮して
らつしやるのかしら。好きな時に来て弾いて下さいって言うてるのに、いつも柏木さ
んと一緒に、お父様のいる時になって。本当に、礼儀正しい方ね。

杏奈 (窓に目をやり) あのお城みたいね。…凜として美しい。

玲子 森さんが…?

窓の外の城を見る二人。微笑む玲子。

玲子 …そうね。でも、お城って、美しいけれど時々怖くなる。元々は敵の攻撃を防ぐ為
のもので、武力の象徴でしょ。中には武器が蓄えられていて、戦いと切り離すことはで
きない。昔は、お城を攻め落とすか攻め落とされるかで戦の勝敗が決まったんだもの。

杏奈 本当は血なまぐさいものなのね。…外から見える姿は、あんなに美しいのに。

玲子 …だからこそ、美しく作られたのかもしれないわ。

森の声 こんにちは。

玲子 あ、はい。

下手に消える玲子。縁先から見える金沢城の桜景色。入って来る森と珠里。

珠里 ちょうどその角の道で会ったの。

後から入って来た玲子、ふと森を見つめる。

珠里 どうかした?

玲子 (照れくさそうに) あ、いいえ。珍しいですね。柏木さんが遅れるなんて。

森 急患の手術が長引いているようです。

珠里 手術? あいつ、いつから臨床になったの?

森 人手が足りなくて、時々狩りだされると。いや、でも執刀じゃないから。

珠里 当然。外科じゃないし。第一実習で何回も卒倒した奴だよ?

森 介助的な仕事だと言ってたけど、大丈夫かな。

珠里 皆戦場に連れて行かれちゃって、医師不足もここに極まれりか。ま、そのおかげで、
私も繰り上げ繰り上げで、現場で働かせてもらってるわけだけど。

玲子 若い男性のお医者様、本当に少なくなつたものね。

珠里 それで、柏木誠が手術室にいる図って…、相当怖いものがある。あ、これ手土産。

玲子 あら、すみません。いつも。

珠里 親父の知り合いが持って来たの。おすそ分け。

玲子 軍人さん達とお付き合いのあるお家って、凄いのね。今日は何？
珠里 牛肉。今時滅多に手に入らないよ。

包みを開けかけた玲子、森と顔を見合わせる。

玲子 …大丈夫かしら。柏木さん。

森 …先に調理してしまえば。

珠里 あ。そうか。ははは…。いいよ。どんな顔するか見ものだわ。ここに置こう。

玲子 だめよ。珠里さん。

いきなり入って来る誠。

誠 すまん。遅くなった。

あわてる一同。玲子、とっさに、包みを違い棚の人形の隣に置く。

誠 何？どうかした？

森 いや、早かったね。

珠里 大丈夫だった？久しぶりの手術室は。

誠 言うなよ。思い出したくもない。

珠里 またやったの。(あげる仕草で)ウエツ…。

誠 かろうじて持ちこたえたよ。外科の担当医が高齢で手術中万一のことがあつては大変

だから一応誰かついてるって言われて。看護婦の手も足りないし、何の因果か俺が…。

森 それはお疲れさま。

珠里 そんなに血を見るのが苦手なのに、何で医者になんかになったのかね。

誠 後悔してる。つくづく向いてないよ。…あの頃は、母親を亡くしてすぐだったから、

病気で苦しむ人を助けたいと、そんな気持ちだけで医学の道に進もうと決めたんだが。

玲子 柏木さんは、お優しいから。

珠里 優しいと軟弱は違うよ。玲子さん。

森 珠里先生は厳しいね。

珠里 客観的と言ってほしいわ。森は、誠とは違った意味で優しいけど。

誠 それは認めるよ。森の優しさは強さと同じだ。戦う武器になる。

玲子 森さんが誰と戦うんですか？

珠里 そりゃ敵でしょ。今の中国の敵。…は、共産党の八路軍？

誠 それとも蒋介石の国民党軍。はたまた、日本か。

玲子 え？どういうことですか？今の南京政府の汪兆銘さんって、日本の認めた方でしょ？

今、日本に来てらして名古屋の病院で入院しておられるって言う…。

珠里 認めると言うこと自体が、中国を支配してることだからね。

誠 要は、森がどこの立場に立つかってことだ。

森 僕の国は、本当に複雑だ。…実は、今日は皆さんにお別れを言いに来たんです。

森を見る一同。

森 日本では本当に沢山の人達にお世話になりました。多くの事を学び数限りない出会いがあつた。でも、もう自分一人が悠長に勉学に励む事態ではない。僕は故国に帰ります。

誠 やつぱり本気なのか？森。

森 はい。国に帰って少しでも人々の役に立ちたい。今はもう居ても立ってもいられない。

珠里 …決めたのね。

森 はい。

玲子 寂しくなりますね。

森 また会いましょう。いつか。きっと。

珠里 そうね。

誠 こっちが会いに行くよ。大陸に。

森 待っているよ。

誠、違い棚の人形に近づく。

誠 …いつか森が言ったように、こんな世界になれば…ね。

人形に目をやる一同。

誠 様々な国の布を、美しくまとった人形。これが世界なら何と素晴らしいことだろう…。

珠里 素敵ね。でも、それには、何年、何十年かかることか。

森 人の命には限りがある。でも人の想いは永遠です。何十年、何百年かけても、やり遂げる、その高い志と強い意志こそが、理想を現実に変えるんです。

森を見つめる一同。誠、人形の横の包みに気づく。

誠 これは？

玲子 (あわてて包みを手に取り) 何でもありません。

誠 何だよ。

森 知らない方が幸せなこともあるんだよ。この世には。

誠 意味深なこと言うなよ。

珠里 だめだめ。知るべきことは知らなくちゃ。

珠里、玲子の手から包みをひったくり、開いて中身を見せる。
珠里 どうだ。今日はすき焼！

生肉に目を背ける誠、必死に口元を押さえてこらえている。

珠里 おお。少しは成長しましたね。柏木先生。

玲子 珠里さん。

誠 当り前だ。生肉ごときで医者が…。

こらえきれず、縁側に走り、庭先に吐く誠。

玲子 大丈夫ですか？

誠 …ごめん。庭先で。

玲子 構いません。気にしないで下さい。

森 ふざけ過ぎだよ。珠里先生。

珠里 そんなこと言っつて、目が笑ってるよ。森。

慌てて渋面を作る森。

誠 みんな笑ってるだろ。いいよ。どうせ。俺は気が弱くて臆病者だ。

玲子 …それが柏木さんの美德です。

森と珠里、顔を見合わせ、にやにやする。

玲子 何ですか？

珠里 いいえ。別に。

ふと気づき、恥ずかしそうに包みを持って下手に行こうとする玲子、一陣の

風に舞い上がる桜の花びらに足を止める。

誠 …森は、これが桜の見納めか。

森 忘れないよ。この美しい光景…。君達と出会えた幸運。楽しかった日々。僕のかげが

えのない宝物だ。

珠里 (庭先を指し) それにこれも覚えておいて。

玲子 珠里さん！

珠里 湿っぽいのはごめんだわ。…永遠の別れじゃあるまいし。…そうだ、オリンピック！

玲子 東京オリンピック。残念でしたよね。アジアで初めてのはずだったのに。

誠 今年のロンドンも中止だ。…戦争は、全てを飲み込んでしまう。

珠里 4年に一回。会おうよ。みんなで。

玲子 この、みんなで？

珠里 そう。ここで、あのお城の桜を見に集まろう。

誠 それはいいな。

森 毎年は無理だけど、4年に一度なら、来られるかもしれない。

玲子 珠里さんにしては、ずいぶん乙女な発想。

珠里 何よ。にしては…って。いい？決まりね。

誠 よし、約束だ。

うなずき合う一同。

誠 森、弾けよ。一曲。

森 別れの曲か？

玲子 寂しいこと言わないで下さい。

珠里 旅立ちの曲よ。

微笑む一同。違い棚に立てかけられた二胡を手に取る森、ゆっくりと弾き始める。流れ出す哀調を帯びたメロデー。桜の舞う縁側で聴き入っている一同。やがて辺りは暗くなり、花吹雪の青空の背景だけが残る。

舞台回って現代。夕方の光。上手に城の石垣。その奥に見える桜の木々。

道に佇んで桜を見上げている桜弓（さゆみ）。車の止まる音。下手から出て来る珠里、杏奈、遼介。少し遅れてやって来る光太郎とみわ。

光太郎 え？城北何とか病院で、まだこの先やで。

珠里 ちよつとここで、写真を撮って行きたいんだ。この桜を見せなきゃいけないから。

光太郎 その、昔の知り合いに？

珠里 そう。あんたたち、急ぐんだろ。もう行って。ここから病院までは歩いてすぐだし。

光太郎 ジュリばあ、この辺わかるんか？

珠里 まあね。…この時期には、何回も来てるから。

光太郎 ええ？そうなん？…ほな、岬さんは？どうしはる？

遼介 あ、いや。俺達…、俺もここで。ありがとごいしました。

光太郎 大丈夫ですか？

遼介 はい。お世話になりました。

光太郎 いや、別に何も。

珠里 （光太郎とみわに）さ、とにかく、あんた達は急ぎなさい。

みわ …私は、…構いませんけど。

光太郎 あかんやろ。お母さん待ってるて。ジュリばあ、ほな、帰りにその病院に寄るわ。
珠里 いいさ。勝手に帰るよ。若者は自分たちのことだけ考えてな。

光太郎 電車、気いつけんと。

珠里 だから、誰に物言ってるの。

光太郎 苦笑しつつ、遼介に会釈をしてみわと一緒に下手に消える。桜の
写真を撮り始める珠里。周囲を見回す杏奈。

杏奈 ここだわ！（驚く遼介に）ここよ。このお城の桜。あの反対側に玲子ちゃんの…！

上手に走る杏奈。追う遼介。杏奈、目を上げて探すが、そこには何も無い。
遼介 駐車場しかないよ。

杏奈 …そうよね。もう75年以上経ってるんだもの。

珠里 （はっと気づき杏奈と顔を見合わせ）じゃ、やっぱり…。

杏奈 …会ってるわよね。私達。

珠里 玲子ちゃんって、あの玲子さん？旧姓…林！林玲子さん。あの柏木誠と結婚した…。

杏奈 …柏木誠…。聞いた名前。…そう、あの気の弱いお医者さん。

珠里 何てこと…。今から会いに行くのが、その柏木誠だよ。

遼介 じゃ、…じゃ、君の帰りがかった持ち主の家はここだったってこと？

杏奈 そう。（珠里に）玲子ちゃんは？玲子ちゃんはどこに行ったの？

珠里 …私も知らない。

杏奈 どうして。何度も来てたんでしょ？

珠里 …戦後、私が初めて金沢に来たのは、19年経った、あの東京オリンピックの年、
1964年。だけど、あの時にはここはもう知らない人の家に建て替わってた。戦争が
終わって東京の病院に勤めてからは日々の生活に追われて、とても金沢まで来る余裕な
んかなかった。4年に一度会おうって言う約束だったのに…。無理をしても、もつと
早く来ればよかった…。ずいぶん悔やんだよ。その後80年代には、ここはマンション
になってて、10年ほど前からは空き地。結局あの時の仲間には、誰も会えなかった…。
杏奈 …じゃ、今から会うその柏木さんに訊けばわかるわよね。玲子ちゃんのこと。
珠里 一昨日の話ではほぼ意識不明。本人はうわごとぐらいで殆どしゃべれないらしい。

ため息をつく杏奈。

珠里 …あの二人が結婚してハルビンに渡ってから、76年…。玲子さんが一緒に引き揚
げて来れたかどうがさえわからない。…長すぎる歲月。

遼介（独り言で）…ハルビン。聞いたことあるな。大貫監督のあの戦争物に出た時だ。確か…。何だったっけ。すごく怖い話だった…。7…51?741?...7…。

少し離れた上手。珠里と遼介を見つめている桜弓。それに気づく杏奈。

杏奈 …玲子ちゃん？

珠里 え？

杏奈 玲子ちゃんだわ。玲子ちゃん！

珠里 （桜弓を見て）…似てる…。

遼介 え？（珠里に小声で）そうなんですか？

桜弓に駆け寄ろうとする杏奈を止める珠里。

珠里 考えなさい。玲子ちゃん、今幾つよ。

遼介 …じゃ、ひよっとして。

近づいて来る桜弓。見つめる珠里、杏奈、遼介。舞う花びら。

一時間後。中央に病院の待合室。下手に病室。人形を手にして椅子に坐っている珠里。その隣に杏奈。側に立つ遼介。下手からやって来る桜弓。

桜弓 今、診察中だそうです。面会できる状態になったらお呼びしますって。

珠里 そう。でも、…よくはないのね。

桜弓 一週間前、あの駐車場で意識不明で倒れてたんです。

珠里 さっきの、あそこで？

桜弓 はい。長谷川さんが気付かなかったら、完全に身元不明のホームレスでした。

珠里 その長谷川さんって人が、おじいさんの昔の知り合いだったのね？

桜弓 引き揚げの時、一緒に帰国した人らしいんです。私もお会いするのは父の葬儀以来で、先日急に連絡を頂いた時は驚きました。今は富山にお住まいで、父の命日には毎年必ずあそこに桜を見にいらしてたそうです。倒れている祖父を見つけた時は父の引き合わせだと思つたと仰つて…。もうあまりにいろいろあり過ぎて、混乱してます。

珠里 私も夕べ、その長谷川さんから電話をもらった時は意味がわからなかった。医療品会社の元会長さんだつて？だから、つてを頼つて私を探し当てたつて言つてたけど。

桜弓 （うなずき）大体祖父が生きてたなんて思つてもいませんでした。戦後引き揚げて来てしばらくして行方不明になってしまった人だつて、父に聞かされてましたから。珠里 お父さんは、いつ亡くなつたんですか。

桜弓 9年前です。癌がわかつた時は手遅れであつたという間に。桜の綺麗な時期でした。

母も私が小さい時に亡くなって、ずっとこの近くのマンションで父と二人暮らしだったんです。あの駐車場の土地が、昔は祖母の実家だったってことは聞いてましたけど。珠里 おばあさん、…玲子さんのことは？何かご存知ない？

桜弓 終戦後すぐ、満洲で亡くなったと聞きました。

珠里 …やっぱり…。日本には帰れなかったか…。

うつむく杏奈。

桜弓 祖父は医者だったそうですけど、妻を亡くして、赤ん坊だった父を抱えて命からがら引き揚げて来たとか。長谷川さん達と仕事を始めたけど、父が8歳位の頃、突然姿を消してしまっただって。父はその長谷川さん達の世話で大きくしてもらったそうです。

珠里 あの誠が、…そんな無責任なことするなんて、信じられない。気が弱くて、臆病者で、でも真面目で几帳面で、…皆から信頼される医学者だったのに。

桜弓 そうみたいです。祖父を知る人は皆そう言ってた。だから父も祖父への恨み言は一切口にしてませんでした。まあ父は二胡だけを弾いていられればいい人だったので。

珠里 二胡？

桜弓 はい。父は二胡の奏者です。あの時代に日本人奏者は珍しくて、…でも、仕事は殆どなかったたので、貧しい生活でしたけど。

珠里 思い出した…。お父さん、森（しん）さんって名前だったよね。

桜弓 はい。柏木森。森林の森。森っていう字です。木ばっかりの名前。その上、祖母の旧姓が林だったとかで、全く何のギャグだって、よく言っていました。

珠里 森（せん）。森の名前を取ったんだ…。あの時、聞いたような…。

怪訝そうな桜弓。

杏奈 …森（せん）さん…。森（しん）ちゃん…。そうだ。あの赤ちゃん…。

遼介 （杏奈に）何か思い出したの？

杏奈 （珠里に）…あの頃、確かに私達会ってた…！最後に会ったのが、満洲のハルビン。杏奈を見る珠里。暗くなる舞台。

回想。1945年晩春。ハルビン。薄暮。

紗幕の向こうに透けて見える誠の住まい。上手に居間。下手に玄関口。居間の箆笥の上に人形。その横に坐っている杏奈。盆を持って出入りする玲子。

杏奈 今日は忙しそうね。お客様？

玲子 誠さんの部下の方。若い人だから食欲旺盛で、気持ちいいぐらいの召し上がり方よ。

杏奈 玲子ちゃんも若奥様ぶりが板について来たわね。

玲子 もう若くはないわ。母親よ。

赤ん坊の泣き声。

玲子 あら、泣き出した。ああ、こういう時アンナちゃんが子守をしてくれたらね。

杏奈 赤ん坊の気持ちはわかるんだけど、向こうは相手にしてくれないわ。まずは言葉を覚えてくれなくっちゃ。今の泣き方は抱っこ。

孝作の声 では、これで失礼します。

玲子 あ、はい。

下手。玄関で誠に挨拶をしている孝作。

孝作 ありがとうございます。すっかりごちそうになりました。

赤ん坊を抱いて玄関口に出て来る玲子。

玲子 ごめんなさいね。ばたばたしてしまつて。

孝作 とんでもありません。いつも殺風景な寮に一人でいるので、にぎやかなのが嬉しかったであります。奥様の手料理に、故郷の母親を思い出しました。

誠 長谷川君は、北海道だったか。

孝作 はい。旭川であります。

玲子 それなら、寒さには慣れてらつしやるわね。

孝作 しかし、ハルビンほどではありません。この冬の寒さには参りました。

誠 確かに。僕も、長く金沢に住んでいたが、こんな寒さは経験したことがない。

孝作 しかし、田舎のことを考えると、ここは天国であります。全館暖房完備で、水道も電気もガスも通っており、食べることの心配もなく、給金をもらいながら勉強もさせてもらえる。まるで、夢の国であります。

誠 ……そうか。若い君らには、確かに夢の国…かもしれないな。

顔を曇らせる誠。

孝作 では、これで失礼します。

誠 またいつでも来ればいいよ。

玲子 お待ちしています。

孝作 はっ。ありがとうございます。

敬礼をして下手に行く孝作。紗幕の手前。メモと周囲を見比べながら歩いている男装の珠里。下手から出て来る孝作。

珠里 ちよっとお尋ねします。関東軍防疫給水部の隊員の社宅は、こちらでしょうか。
孝作 はい。

珠里 よかった。道に迷ったもので。柏木誠医師のお宅に伺いたいんですがご存知ですか。
珠里の風貌を見て、いぶかしげな孝作。

孝作 部外者は、ここから先は許可なく立ち入れないことになっております。

珠里 部外者ではありません。金沢医大病院外科部長から柏木誠医師に機密重要書類を届けるよう命じられた外科医の園田と申します。柏木夫妻の親しい友人でもあります。

孝作 はっ。それは失礼致しました。柏木技師殿には、いつもお世話になっております。今も、お宅に伺った帰りで。ご案内致します。どうぞ。

珠里 それは幸運だった。ありがとう。

上がる紗幕。柏木家。玄関に立つ孝作と珠里。戸を開ける玲子。

玲子 あら、長谷川さん、お忘れ物？

孝作が口を開こうとするより早く後ろから飛び出し、玲子に駆け寄る珠里。

玲子 …珠里さん！

珠里 会いたかったよ！

奥から玄関に出て来る誠、驚いて珠里を見る。

珠里 (誠に) よっ！

誠 …お、おう。

一礼をして下手に去る孝作。

玲子 どうなさったの？いつこちらに？

珠里 昨日着いた。さすがハルビン。日が暮れるとまだこんなに冷えるんだね。

玲子 とにかく上がって。

珠里 お邪魔します。(見回して) おお、凄い。噂通り、立派な社宅。内地とは大違いだ。

中央の居間に移動する三人。

誠 よく入れたな。ここは部外者はなかなか…。

珠里 そこで偶然出会った君の部下に案内してもらった。金沢医大外科部長からの機密重要書類を届ける使命を帯びて参りましたって。

誠 …外科部長？機密重要書類？

珠里、鞆から書類を取り出し誠の目の前に置く。

珠里 何てことない学会報告。親父が急に仕事でハルビンに行くって言うからくっついて

来た。で、今日明日は別行動で、君たちに会いに来たのよ。泊めてね。

玲子 もちろんですよ。あ、珠里さん、お腹は？

珠里 ペーペー。

玲子 ちよつと待って下さいね。さっきのすき焼きの材料、まだあるから足しますね。

珠里 すき焼き？牛肉？（笑いながらうなずく玲子に）ここはどこ？ユートピア？内地じゃ、

お肉なんてもう何ヶ月も顔見てない。そうだ、あの日のすき焼き。あれ以来だよ。

いそいそと奥に姿を消す玲子。

珠里 玲子さん、きれいになった。

誠 そうか？

珠里 赤ちゃんは？

誠 さつきまでぐずってたが、やつと寝た。

隣室に目をやる誠。そつと隣の部屋を覗く珠里。

誠 起こすなよ。

珠里 大丈夫よ。…わ。可愛い。丸々してる…。

物音を立てないように元の位置に戻る珠里。

珠里 内地じゃ、母親の栄養不足で母乳も満足に出なくて死ぬ子も沢山いるけど、ここ

じゃ、子育ても苦労が少なそうね。

誠 ああ。大抵の物はあるからね。

珠里 本当に噂通りだ。満洲では何でも手に入る。まさにこの世の天国。

皮肉な笑みを浮かべながら、書類に目を落とす誠。

珠里 研究費も使いたい放題。実験材料もいつでも必要なだけ手に入る…。

珠里を見る誠。

珠里 大丈夫？

誠 何が？

珠里 君に務まるの？ここの仕事。

誠 ……どういう意味だ。

珠里 気が弱くてお人好しで臆病者。正義を曲げるのが苦手な君が、…やっていけるの？

誠 散々な言われようだ。相変わらずだな。珠里先生は。

珠里 生体実験。

びくっとして珠里を見る誠。

珠里 医学界では公然の秘密。関東軍防疫給水部。通称731部隊。細菌兵器の研究の他に、…日本に抵抗する中国人やロシア人の捕虜を、…人体実験に使ってるって。

うなだれる誠。

珠里 そのこと知ってて、受けたの？この話。

誠 (首を横に振り) …中には、全部承知の上で来た医師もいる。だけど、俺は、全く知らされていなかった。臨床は向いていない、思う存分研究に没頭できる場が欲しいと願っていたら、…ここに回された。何て皮肉だ。我ながら、これは喜劇かと思ったよ。

珠里 実態は…。

誠 ペストやコレラ、凍傷の実験だ。健康体に菌を植え付けたり、真冬の屋外に放置して故意に疾病状態を作り出す。他にも、生きているマルタから血を抜いたり、解剖を…。

珠里 マルタ？

誠 囚人のことだ。相手は人間じゃない、丸太ん棒と思えば罪悪感はなくなる。

珠里 …なくなるの？

誠 最初は吐き気がして治まらなかった。夜も眠れず、どうしてこんなところに来てしまったのかと自分を呪った。…しかし、…日が経つうちに、慣れるんだ。感覚が麻痺し始める。…自分一人じゃない。それぞれの実験は、順に行っていく。自分の担当が終われば他の部署に回して、…つまり、マルタには死に至る最期まで、幾つもの実験が行われる。最初から直接自分が手を下すわけじゃないから、…分担されるんだよ。罪の意識も。

珠里 …おぞましい。

誠 おぞましいよ。酷過ぎる。…しかし、彼らは、いずれ処刑される身だったんだ。それなら無意味に死なせるよりも、医学の研究に役立つ方が…。

珠里 医者者の傲慢そのもの。神にでもなったつもり？

誠 …神がいれば…と、切実に思うよ。

玲子の声 珠里さーん。そのお茶、自分で入れて下さいね。今、手が離せなくて。

珠里 あ、はい。了解！(小声で)奥方は知ってるの？

誠 あいつは何も知らない。ただ俺が研究を続けているとしか思っていない。ここにいる大抵の家族は知らされていないはずだ。

ため息をつく珠里。苦しそうに顔を歪める誠。

誠 …森が、いるんだ…。

珠里 え？

誠 林森（リン・セン）。

珠里 は？

誠 痩せこけて、顔半分はひどい火傷で、最初は気づかなかった。

珠里 ……どうして、ここに！

誠 わからない。過激な抗日活動家で、捕まった時は日本語も話していたらしい。

珠里 本当にそうなの？間違いないの？

誠 二胡の名手だった…と。あの気品で明らかに他の者と違っていたので皆が詮索したとか。凍傷で殆ど動かなくなった指で二胡を弾く仕草をしているのを見た者もいたらしい。

珠里 助けて！友達だって言っただけ！

誠 無理だ。ここは軍隊だ。

珠里 見捨てるの？友達を、あの森を？

誠 敵の捕虜を、助けることなんかできるわけがない。まして、ここに送られてくるのは、筋金入りの抗日運動の闘士や諜報活動をしていたような人間なんだ。…絶対に無理だ。

珠里 だけど…！

誠 関わりがあると知られたら、…それだけで、こつちまでスパイの疑いをかけられる。

珠里 ……見損なっちゃったよ。柏木誠。

誠 そういう人間なんだ。俺は、本当に憶病で、卑怯で、小心者の…。目の前の友達一人助けることのできない…。情けない…。

玲子 うなだれる誠。隣室で泣く赤ん坊の声。奥から鍋を提げて入って来る玲子。お待たせしました。あら、また起きてしまったの？森（しん）ちゃん。

鍋を食卓に置き、隣室から赤ん坊を抱き上げて出て来る玲子。

玲子 ほーら。珠里おばちゃまですよ。

珠里 おばちゃまって何。お姉さまとお呼び。

玲子 珠里お姉さま。言いくいいわ。珠里さんでいいでちゅね。

珠里 この子は？しん…君？

玲子 森って書いてしんと読ませるの。

珠里 森…。

玲子 森（せん）さんの字をもらったんです。あんな高潔な方にあやかればいいかなって。

（誠に）ね。お父さん。

曖昧にうなづく誠。ふと居間の奥に立ってかけた二胡に目をやる玲子。

珠里 (目で追い) あれ、こっちに持って来たんだね。

玲子 ええ。父が亡くなって今では形見になってしまつて。もしこっちで森さんに偶然お会いできればなんて思つたけど、中国大陸つてほんと広い…。去年お別れした時は、上海に行くつて仰つてたけど、今はどこにいらつしやるのかしら。連絡の取り様もないし、戦争は激しくなるばかり。…またみんなで、あの金沢城の桜を見られる日は来るかしら。

複雑な笑みを浮かべ、赤ん坊をあやす珠里。

玲子 あ、どうぞ召し上がつて。

珠里 戴きます。凄いご馳走。さすがハルビン。(食べつつ) こっちには、桜はないの？

玲子 さあ。見ませんね。もうすぐライラックの花が咲いて、それはいい香りがするそうですけど。何て言つたかしら、ズー…デイン…？

誠 ブーデインシャン。

玲子 そう。ブーデインシャン。でも、やつぱり私達は日本のあのお城の桜が見たいわね。

二人に背を向け、窓辺に立つ誠。

玲子 珠里先生は、お仕事お忙しいんですか？

珠里 若い男性医師はみんな戦地に持つて行かれて、残るは年寄りと女医ばかりなり。人手がなくてくたくたになるまでこき使われて挙句の果てに患者に言われる。…こんな敵の赤毛の女に診られるくらいなら死んだ方がましだ！…こっちは普通の日本人だと認められたくて休み返上で人の何倍も必死に頑張つてるのによ。やつてられるかつてんだ。

箸を置く珠里。その手を握る玲子。鼻をすする珠里。

珠里 やだやだ。久しぶりに会つた友達に愚痴るなんて、私としたことが。

玲子 言つて下さい。何でも。私でいいなら。

珠里 …泣かせないですよ。…旦那の愚痴は？聞いてあげてる？

玲子 この人は、…言つてくれないから、わかりませんけど。

二人の話を背中であらわしている誠。

珠里 で、玲子さんは？

玲子 私は、…話す相手がいるから大丈夫なんです。

珠里 誰？こっちの友達？

曖昧な笑みを浮かべ、居間の方に目をやる玲子。人形と杏奈に当たる光。

窓辺で月を見上げる誠。その後ろ姿を見つめる珠里と玲子。

やがて舞台が真っ赤に染まる。下手に消える珠里。激しい爆撃音。

玲子 あなた！この子を、森を、お願い！

上手に走る玲子。下手から誠に駆け寄る孝作。人々の叫び声。

孝作 柏木さん！こちらへ！早く逃げない！

誠 玲子！戻るんだ！早く！危ない！

森を抱いて動くに動けない誠。上手、炎の中に残されたりュックからはみ出

た人形。その横に坐り込んでいる杏奈。駆け寄る玲子。

杏奈 玲子ちゃん！

誠 玲子！戻れ！玲子！

孝作、玲子の方に駆け寄ろうとするが、爆発にさえぎられて近づけない。

孝作 奥様！

凄まじい爆発音。人形を抱き倒れる玲子。杏奈、玲子の横に伏せる。

誠 玲子！

爆音と共に暗くなる舞台。佇む杏奈に当たるライト。

杏奈 思い出した…。引き揚げの途中、私達は激しい爆撃に遭って、…玲子ちゃんは、あの時、荷物の中の私を助けるために炎の中に飛び込んで…。

顔を覆って嗚咽する杏奈。

現代。下手。病室。

ベッドに横たわる年老いた誠。脇で付き添う孝作。部屋に入って来る珠里。

遠慮がちにドアの前に佇む遼介と杏奈。珠里に挨拶をする孝作。

孝作 長谷川です。昔柏木さんにお世話になりました。園田珠里先生のお名前は、よく聞

かされていて記憶にありましたので、運よく病院関係者から探し当てることができて…。

珠里 赤毛の大女と言うだけで、簡単だったでしょう。

孝作 一番信頼できる医者で、同志だった…と。

珠里 この人が…？そんなことを…。

ゆつくりベッドに近づく珠里。

孝作 私にもわかりました。…昔、一度だけですが、お会いしましたので。

珠里 (はっとして)…あの時の？…ハルビンの…関東軍防疫給水部の隊員住宅。

孝作、一瞬、遼介を気にする。

珠里 彼は今回の旅の連れ。全く関係ないのでご心配には及びません。…大丈夫。誰にも
言いません。言う必要もない。柏木誠が精神を病むほどの狂気の歴史は絶対に消せない

けれど、それを個人の責任にする資格は、私ごときにはありません。

うなだれる孝作。誠の枕元による珠里。

珠里 …来たよ。柏木誠先生。ずいぶん待たされた。いや、待たしたのかね？こんなにやつれて…。何やってたんだよ。君は。…どうして君だけが…。

孝作 …人一倍優しい方でした。誠という名の通り、本当に誠実な…。

珠里 優し過ぎたよ。誠実過ぎた。だから、こんなことに…。あの部隊で、実際に責任のある人間達はうまく立ち回って、戦後はずいぶんいい目を見たつてのに。

孝作 …あの時の幹部達は、ソ連が攻めてくる前にいち早く専用機で帰国し、この金沢で仮本部を作り事後処理をしました。一か月後、以降は決してお互い連絡を取り合うなど命じられて、部隊は解散、皆散り散りになったそうです。

珠里 …そうか。あの頃、ここには陸軍の第九師団がありましたね。

孝作 …柏木さんのような軍属とその家族も、終戦前に専用列車を乗り継ぎ早めに帰国できたんです。しかし、我々下っ端はハルビンで過酷な残務整理をさせられた後苦勞して引き揚げて来ました。柏木さんは、自分の特権を使わず、最後まで我々若い者の為に尽力してくれました。それで引き揚げが遅れてひどい爆撃に遭い、…奥様を亡くされたんです。

杏奈に目をやる珠里。うなだれる杏奈。

42

珠里 で、長谷川さんは、戦後もこの人と？

孝作 はい。…私はずっと柏木さんと一緒だったので、故郷の旭川にも帰らず、この近くにあった奥様の実家に一緒に住み始めました。…柏木さんは、人が変わったように落ち込んで、森君の世話も不安でとても目を離せる状態ではなかったんです。この人は自分が医者だったことは誰にも言わなかった。…やがて、他の引き揚げ仲間と立ち上げた繊維の仕事がうまくいくようになって、一時元気になったんですが、それも東の間で、朝鮮戦争が始まった頃からまた次第に様子がおかしくなって、…ある日突然姿を消してしまっただんです。珠里 まだ小さかった我が子を置いて出て行ってしまえるほどの、…重い記憶だったと…。

孝作 あの頃の森君は本当にあどけない瞳をしていて、かわいい盛りでした。…だからこそ、その瞳に映る自分の姿が耐えられなかったのかもしれない…。

孝作を見つめる珠里。

孝作 …ハルビンのあの部隊でのことは、記憶から消そうとしても消せるものではありません。…私が人間ではなかった時代があったことなど、…口にできるわけがない。

遼介 命令されてやったと言えば、よかったんじゃないんですか？（驚く孝作に）あ、すみません。つい。

珠里 この人、売れない役者なの。

遼介 昔、戦争物の映画でやりました。陸軍兵士の役。ハルビンの731部隊を背景にした本だったんで、少し勉強しました。

孝作 …捏造や間違いも沢山ある。…所詮今の人にはわからない。あの頃の我々の想いは。遼介 わかりませんよ。もちろん。でも、長谷川さんやこの柏木さんが戦争の犠牲者だったってことは、わかります。責めを負うべきは、もっと別の立場の人達だった…。

孝作 （微笑んで）犠牲者…でも、加害者でも、あつたわけです。明らかに当事者だった。我々は。（たじろぐ遼介を見つめ）あそこにいなかった者達に批判も擁護もされたくはない。…そして、私は今、もしあの時と同じ状況になったら、…やはり同じ選択をするでしょう。私には、この人のように自分の心を破壊してしまうほどの美しい魂はない。

あの頃も今も、ほとんどの人がそうであるように、…人間はまた同じ過ちを繰り返す…。
遼介の持つ人形に気づく孝作。

孝作 これは…。

珠里 玲子さんの人形。彼女が命とひきかえに守った…。

孝作 …引き揚げ直前に失くした、あの…？

人形に触れる孝作。嗚咽。涙をこらえて佇む杏奈。孝作の携帯が鳴る。孝作、携帯を切ると、誠の枕辺に立ち敬礼をする。無言で一同に会釈して部屋を出る孝作。ドアの閉まる音に、わずかに動く誠の手。その手を取る珠里。

珠里 わかる？珠里。赤毛のジュリ。今じゃ白髪で見分けがつかないけど。

誠 …ジュ…、ジュリ…。

珠里 そう。珠里だよ。園田珠里。

誠 …せん…。せん…。せん…。

珠里 …せん。森？林森（リン・セン）のこと？

誠 …せん。たすけ…られ…なかった…。たすけ…られ…なかった…。

目頭を押さえる珠里、遼介に近づく。

珠里 やって。森の役。（驚く遼介に）ほんの少し中国訛りの日本語で語りかけて。

遼介 …え？ええ？無理っすよ。

杏奈 役者でしょ。できる。君なら大丈夫。

遼介　ちよ、ちよっと。俺の何を知ってるんです。

杏奈　ヤクザ、やったでしょ。あの乗り。（激しく首を横に振る遼介に）つべこべ言うな。人の死に際なんだ。一世一代の大芝居見せてみな。

珠里に引つ張られ、誠の枕元に連れて行かれる遼介。

遼介　（小声で）え、何を言えば…。

珠里　考えて。森になったつもりで。彼の魂を慰めてやって。

遼介　そんな、無茶な…！（促され必死で考えながら）…君の、君のせいじゃないね。

…僕は、自分貫いた。それだけ。

珠里　（小声で）もっと自然な日本語で。

遼介　中国訛りって言うから。

珠里　単語の発音が微妙だっただけ。森の言葉は完璧だった。

遼介　そんな高度な訛り…。

誠　…せん。…せん…。

遼介　（珠里に促され）…君のせいじゃない。僕は自分を貫いた。それだけだ。

誠　…目の前の…友達…を、…助け…られな…かった…。俺は、…君を…見殺しに…。

苦しうに唸る誠。唇をかむ珠里。遼介、自分の手首を見て考えている。

遼介　…思い上がるな。…助けの要らない人間もいる。

驚いて遼介を見つめる珠里。はっと気づいたように動かなくなる誠、深い息をする。誠の頬を伝わる涙を手のひらでそっと拭く珠里。ほっとして額の汗を拭う遼介。見つめる杏奈。ノックの音。二胡を手に入ってきた桜弓。

珠里　今、少し意識が戻りました。

桜弓　そうですか。…父の二胡です。昨日、二胡二胡ってうなされたように繰り返して。長谷川さんが、昔満洲の祖父の家にあたって仰ってたので、もしかして思っ
て。今、許可もらってきました。少しなら弾いて聞かせてやってもいいって。

珠里　あなたも弾けるの？

桜弓　父から少しだけ手ほどきは。とても父には及びませんけど。

珠里　聴かせてあげて。今なら聴こえるはず。

うなずく桜弓、弓を構える。ゆったりと流れ出す旋律。誠の指先が動く。

珠里　聴こえる？森の二胡だよ。あの時と同じ。桜が咲いてる。

デジカメを取り出し、画像を誠の方に向ける珠里。目を閉じたままの誠。

珠里 君も見に来たんだね。金沢のこの桜。もう4年後はない。今年が最期だって、覚悟して…。だろ？…やっとなにに合ったよ。

一胡の旋律が静かに流れる中、後方の窓に桜の花びらが舞う。深い青に染まる舞台。上手。廊下を急ぎ足で歩いて来るみわ。追う光太郎。

光太郎 おい。待って。そやから、俺がやるて言うてるやんか。

みわ いいえ。結構です。あの人に頼みます。本職の役者だし、その方が後腐れないし。

光太郎 後腐れて何やねん。ただお母さんに挨拶したらええんやろ。お腹の子の父親やて。それぐらいの芝居、俺かてできるって。

みわ うるさいですよ？母親。仕事は？食べていけるのか。住まいは？追跡調査するかも。

光太郎 そうなん？：大丈夫や。家の花屋継ぐとか、なんぼでも口から出まかせ言うたる。みわ 北中さんにそんな迷惑かけられません。：北中さん、優しすぎます。

光太郎 :みわちゃん、ほんま人を見る目がないんやな。それやから、：そんなあほな男に騙されてしもたんやろ。

みわ あいつは、ほんとどうしようもなかったけど、：北中さんは、いい人過ぎます。こんな私のために、そんなことまで…。

光太郎 (背を向け) :どこがいい人や。友達を見殺しにしたような卑怯な奴が何で。

光太郎を見つめるみわ。

光太郎 :ジュリばあの孫。晴人。幼稚園の時からずっと一緒に、一番の友達やった。あのばあちゃんに似ると、気の小っちゃい奴で、いっつもにこにこしてるだけの奴。

下手、杏奈と一緒に出て来る遼介、光太郎とみわに気づく。

光太郎 そんな晴人が、悪ガキらのいじめに遭い出した。4年生の夏。靴を隠されて、池に突き落とされて、金巻き上げられて。それでも、あいつはいっつもにこにこして…。そやから誰も気いつかんかった。俺は、：知ってて知らんふりしてた。関わり合いとうなかつたんや。：そやけど、いっぺんだけ声かけた。大丈夫か：て。：晴人は精一杯の笑顔を作って小さい声で、大丈夫：て。そんなん嘘や。晴人をかばったら今度は俺がいじめられる。優しいあいつはそれがわかってて、そう言うたんや。俺はそれをええことに、結局何もせんかった。：その次の日の朝、晴人は川で溺れて死んだ。事故やて言われたけど、違う…。晴人は、最期にあの笑顔で俺に助けを求めたんや。そやのに、俺は気づかんふりをした。：そのことを、晴人の両親にもジュリばあにも、いまだに言うえん。：こんな卑怯な奴なんや。俺は。な。そやから気兼ねなんかすることないねん。こんなしょうもない奴、せ

いぜい利用したらええんや。彼氏の代役ぐらい、ちょちょいでやったるて。

みわ (涙ぐみ) ごめんなさい……!

光太郎 ええって。

みわ 違うんです。私……。初めから、北中さんを騙すつもりでした。……一緒に家に行って、彼氏だつて紹介して。その後、……関係を持って、それから妊娠したつてことに……。

驚く光太郎。

みわ ……すみません!

立ち聞きをしながら呆気に取られている遼介。目くばせをする杏奈。

遼介 (小声で) 女、怖あ……。

下手。病室のドアから出て来る珠里と桜弓。

珠里 じゃ、私はこっちで待ってるから。全部終わったら、また後で。

桜弓 はい。ありがとうございます。

会釈をして下手に去る桜弓。目頭を拭うと歩き出す珠里、光太郎とみわ

に気づく。柱の陰の遼介と杏奈、珠里を止めようとするが間に合わない。

珠里 (光太郎とみわに) あれ? どうした。あんたたち、行ったんじゃなかったの?

光太郎 あ、ああ。ちょっと。……知り合いの人は?

珠里 駄目だった。間には合ったけど。……ありがとね。

光太郎 ……いや。別に俺は……。

珠里 どうしたの。何かあった?

みわ ……あの、岬さんをお願いがあつて戻つて来ました。(きよとんとしている遼介に)

……私、妊娠してるんです。それで……。

光太郎 おい。(あわててみわをさえぎり) ごめん。俺のせいなんや。今からこいつの母

ちゃんに会って許してもらうつもりなんやけど、あの、……その、……言い方がな。あんた
やったら、そんな役やったことあるかな……て思うて、教えてもらおうかと。

驚くみわ。杏奈と顔を見合わせる遼介。微笑む珠里、光太郎の額をつつく。

珠里 いったい前になりやがって。

光太郎 27やで。俺かて男や。

珠里 ……男になつたね。立派に。よかつた……。

光太郎 ジュリばあ……。俺……、晴人のこと……。

珠里 (さえぎつて) せいぜい考えて、苦しんで、悲しんで、楽しむんだよ。晴人の分も。

あんたは、これからまだまだ長い時間を生きて行くんだから。

はっと気づく光太郎、唇をかむ。そっと光太郎の手を握るみわ。

遼介 ……あ、え…と、…じゃ、…という設定にする？会っていきなり土下座か、好印象でしばらくなじんでから土下座か。さりげなく用事を手伝って土下座か。

光太郎 ええ？どっちにしても土下座？

遼介 相手に有無を言わせないためには効果的。

光太郎 なるほど。で、セリフは？

遼介 ちよつとこつちの椅子で稽古してみよう。杏奈、母親役やってみて。

杏奈 わかった。どういうキャラクター？あ…。

光太郎 え？

遼介 あ、いや。

光太郎 それ、人形…やんな？（曖昧にうなづく遼介に）今、喋ったような…。

遼介 聴こえたの？

光太郎 まさか。…腹話術？

遼介 （苦笑して）ま、この天と地との間には、人智も及ばぬことがあるわけで。

杏奈 ハムレット。

首を傾げながら上手に移動する光太郎と遼介、杏奈。珠里に頭を下げるみわ。

みわ すみません。私…。

珠里 いいさ。あんた達二人が決めたことなら。

みわ 心配しないで下さい。私、…産むつもりはありませんから。

みわを見つめる珠里。

みわ 母親、…私が小さい頃全然家に帰って来なくて。自分勝手に男にだらしないシングルマザー。世話は何もしないくせに、私にピンクのドレスやアクセサリーつけさせて写真撮ったり、そうかと思うと酒ビン投げつけてお前なんか産むんじゃなかった、私の人生返せとか、ほんと意味不明。（ため息をつく珠里に）…自分がババアになって男に振り向かれなくなったもんだから今度は人のこと構い始めて、いつ結婚するんだ、孫の顔を見るまで死ねないとか、世間並みの母親面してうざいったらない。…だったら丁度いい。彼氏連れて帰って、妊娠したって喜ばせておいて、もう少ししたら墮ろしてやる。

二度と子供はできないって言って、あいつの希望を断ち切ってやるんです。いい気味だ。珠里 それで、あんたは幸せになれるの？

みわ …そんなことどうでもいい。私は、あいつに復讐できれば、それでいいんです。

珠里 あんたが思い切り幸せになって、それを見せつけてやるって手もある。そっちの方が本当の復讐になるよ？お前なんかはこの幸せがわかるかい…って見返してやれば、それこそいい気味。光太郎なら、それができると、私は思うけどね。

みわ …北中さんに、あんなクズみたいな奴の子供を、押し付けるなんて…。

珠里 生まれた時からクズの赤ん坊なんて、いやしない。

はつと気づくみわ。

珠里 誰でもみんな最初はキラキラ輝く透明な入れものなんだよ。それを磨いて綺麗な色を入れるのも、傷をつけてどす黒い色を入れるのも、先にこの世に出て来た者たち。

みわ …でも、私みたいな母親…。

珠里 誰に気兼ねしてんのさ。怖いものはないだろ？医者だからありきたりのお説教してるなんて思うんじゃないよ。自分の子供を持たなかった私が言うんだ。その子を、殺すなって言ってるの。あなたには今生かせる道があるんだから、生かしてやれって。

珠里を見つめるみわ。

みわ …先生の孫が、北中さんの友達だったって…。

珠里 うちの病院の待合室に置き去りにされた赤ん坊をね、養子にしたの。晴人はその子の息子。この赤毛も背丈も、私オリジナルの異形は遺せなかったってわけ。昔は、両親の海を越えたラブロマンスを恨んだもんだったけどね。…若かったよ。私も。

上手からやって来る光太郎、遼介、杏奈。

光太郎 よっしゃ。リハできた。これで完璧や。行くで。

遼介 いい？臨機応変に。相手のキャラをよく見てその場の空気を読む。アドリブはOK。

光太郎 ウッス。(みわに)まさかやけど、いきなり殴るとかそういうキャラちゃうよね？

みわ …どういう想定してます？うちの母親。

光太郎 いや。(珠里をちらと見て)こういう人もおるから。

珠里 あんた、私の若い頃を知ってるのか。

光太郎 やっぱり。こわ…。

みわ 大丈夫。ただ、イケメンには弱いんで。だから岬さんに頼もうと思ったんですけど。

珠里 逆に、奪られたら困るだろ。ちょうどいいよ。光太郎で。

光太郎 何やねん！

笑う一同。手を振って下手に行く二人。みわ、ふと足を止め振り向く。

光太郎 どうかした？

みわ あの人形も笑ってたみたいで。…まさかね。

光太郎 …そんなことも、…あるかも。

首を傾げて微笑みながら下手に消える二人。窓から明け方の光が射し込み始める。それを見つめる珠里と杏奈、遼介。

珠里 (遼介に) …さっきは、ありがとう。いい芝居をしてくれて。

遼介 え。…いえ、あんなことを言ってしまった。よかったんでしょうか。

珠里 森だったらたぶん、ああ言ったと、思う…。

かすかな笑みを浮かべて遼介の肩に手をやる珠里。うなづく遼介。

杏奈 …何て日かしら。…去る命と来たる命と。…はるか昔に去ってしまった命たち…。

珠里 …さて。どうする？杏奈は、どこに帰る？去ってしまった命の元には帰れないよ。

杏奈を見る遼介。

杏奈 できれば、あの…。

下手よりやって来る桜弓。

桜弓 すみません。今、手続きが終わりました。もうすぐ葬儀社の人に来るそうです。

珠里 お一人で大変ね。あ、ご家族は？

桜弓 誰もいません。…以前はいたんですけど、別れましたので。

珠里 そうですか。…何か、できることがあれば。

桜弓 いえ。でも、ご無理でなかったら、あと少しして下さいますか。今、感染症の方で

この病院も忙しいみたいで、こっちの病棟にはなかなか来てくれないうです。長谷川さんも、一昨日からずっと付き添って下さっていたので、今日はお帰りになったし…。

珠里 もちろん。私は、…(遼介を見て) 私達は急がないから。

桜弓 …父や祖父のことを、知っていて下さる方に、見送って頂きたいと…。

体がふらつく桜弓。とっさに支える遼介、珠里の指示で長椅子に桜弓を寝かせる。すぐに桜弓の脈を取り、様子を診る珠里。

珠里 大したことはないわね。急なことで疲れが出たんでしょう。

桜弓 すみません。一昨日から寝てないので。わからないことばかりで、戸惑って。

珠里 そうよね。わかります。

桜弓 一人なので、誰にも話せないし、何だか心の中にどんどん溜まって来てしまっ

いつもは、二胡を弾いてると、気が紛れるんですけど。

珠里 あなたのおばあさん、玲子さんは、この人形とお喋りしてたみたいよ。

桜弓に人形を差し出す遼介。傍らに立つ杏奈。

珠里 私も、あの頃は知らなかった…って言うより、たぶん忘れてただけね。玲子さんの大事にした手作りの人形なんです。アンナちゃん。

桜弓 アンナちゃん…。何か時代物って感じ…。

杏奈 話して。あなたの気持ちを。私ならいつでも聞いてあげられるわ。

桜弓 ありがとう…。

顔を見合わせる珠里と遼介。人形のスカートを触る桜弓。

桜弓 この生地、見たことがある…。お父さんが持ってた古い友禅の端切れ…。

杏奈 玲子ちゃんが息子の森君のために縫ったおくるみと同じ生地よ。

桜弓 そうだったんだ…。

杏奈 これは、中国のチャイナドレスの生地。この縁取りはフランス製のレース。これはロシアのニーナちゃんの刺繍。日本に帰って来てからも沢山の人に繕ってもらったわ。

桜弓 …アンナは、幸せな人形ね。

杏奈 …そう。世界が私みたいになったら、きっとみんな幸せになれる。昔、そう言ってくれた人がいたわ。…彼は、どうしたかしら…。

上手の照明が落ち、下手の病室が仄明るく照らされる。病室に入る珠里。

ゆっくりベッドに近づくと、白布を取り、誠の顔を見つめる。

珠里 柏木誠。…こんな世界が訪れるなんて、あの頃には思いもしなかったね。…私達は

精一杯生きて来たけど、これでよかったと言えるんだろうか。…君が苦しんだことは無

駄じゃなかったのかな。…森の言っていた幸せな世界なんて本当に実現できるんだろうか。

入って来る遼介、珠里の背後に立つ。

遼介 できます。きっと。人の命には限りがある。でも人の想いは永遠です。何十年、何百年かけてもやり遂げる、その高い志と強い意志こそが、理想を現実に変えるんです。

振り向く珠里。微笑む遼介。涙ぐむ珠里。窓が大きく広がっていく。夜明けの光の中、桜の花びらが舞っている。

幕